



ゲイル・ロード 氏



カルロス・ロベルト・フェレイラ・ブランダオ 氏



李 文亮 (リー・ウェンリヤン) 氏



パネルディスカッションの様子

〈第3回アジア博物館フォーラム〉

目 次

【特集】 『第3回アジア博物館フォーラム』

セッションⅠ 〈基調講演1〉	国際博物館コンサルタント	ゲイル・ロード	3
〈基調講演2〉	ICOMブラジル国内委員長	カルロス・ロベルト・フェレイラ・ブランダオ	5
〈基調講演3〉	中国国务院、中央国史研究館	李 文亮	5
〈基調講演4〉	イタリア博物館技術研究所	アンドレア・サルトーリ	6
セッションⅡ 〈プレゼンテーション1〉	韓国国立劇場公演芸術博物館長	崔 錫榮	7
〈プレゼンテーション2〉	中国博物館協会副会長	安 来順	8
〈プレゼンテーション3〉	文教大学	井上由佳	9
セッションⅢ パネル・ディスカッション			11
総括	JMMA副会長・常磐大学大学院教授	水嶋英治	13

【論考・提言・実践報告】

ハワイ王国の象徴の展示：ピショップ博物館コレクションより	秋山かおり	15
地域の博物館との連携で育成するミュージアム・リテラシー ～中学校における課外での地名調査を通して～	富山大学人間発達科学部附属中学校 堀内和直	23
地域と美濃加茂市民ミュージアムの関係 ～「ていねいな暮らしがあったころ」展をとおして～	美濃加茂市民ミュージアム 可児光生・藤村 俊	28

【基礎部門研究部会 第3回研究会 開催報告】 33

国立科学博物館 亀井 修

【実践部門研究部会 第1回研究会 開催報告】 38

科学技術館 田代英俊／東京大学大学院教育学研究科 小山 治／科学技術館 田代英俊・中村 隆・小林成稔
東海大学 江水是仁・葛西臨海水族園 西源二郎・横浜国立大学 大原一興・目白大学 藤谷 哲・千葉市動物公園 並木美砂子
北海道大学大学院文学研究科 佐々木亨・静岡県立美術館 泰井 良／文化環境研究所 高橋信裕

【支部会だより】

関東支部 エドゥケーター研究会報告			
美術出版社「美術検定」実行委員会 事務局	高橋紀子／千葉市動物公園 飼育課	並木美砂子／JMMA理事 栗原祐司	45

【新刊紹介】

『100人で語る美術館の未来』	共栄大学 平井宏典	50
-----------------	-----------	----

【掲示板】 51

【インフォメーション】 52

特集

本年2月20日(日)に、博物館法制定60周年記念行事として文化庁の協力を得て開催しました「第3回アジア博物館フォーラム」を特集として報告します。

■ 第3回アジア博物館フォーラム ■

1) 開催趣旨

昨年3月21日に開催致しました「アジア博物館フォーラム」を受けて、我が国の博物館の役割を再考し、アジア博物館ネットワーク構築の重要性、国際スタンダードに立脚した人材育成のプログラム等を検討することを目的として「第3回アジア博物館フォーラム」を企画しました。また、このフォーラムを通じて、中国・韓国の博物館の指導的立場にある者と我が国の博物館関係者が意見交換を行うとともに、広く博物館関係者の参加を得て、今後のアジアの博物館の連携・協力の在り方や現代的課題について検討し、相互交流をはかりました。

2) 日時・場所・主催等

- 日 時：平成23年2月20日(日) 午前9時40分～午後6時10分
会 場：東京国立博物館 平成館講堂
主 催：日本ミュージアム・マネージメント学会、東京国立博物館
共 催：全日本博物館学会、日本展示学会、全国大学博物館学講座協議会
後 援：財団法人日本博物館協会、ICOM日本委員会、文化環境研究所
協 賛：株式会社乃村工藝社
協 力：文化庁

3) プログラム

●開会挨拶

大堀 哲 日本ミュージアム・マネージメント学会会長、長崎歴史文化博物館長

●挨拶

銭谷 眞美 東京国立博物館長

●セッションⅠ 基調講演

- ◇「博物館・博物館設計・博物館学研究に影響を与える文化的変化のインパクト」
ゲイル・ロード 国際博物館コンサルタント
- ◇「ラテンアメリカ圏およびブラジルにおける博物館と博物館学研究の動向」
カルロス・ロベルト・フェレイラ・ブランダオ ICOMブラジル国内委員長
- ◇「中国国学研究センターの構想—社会教育活動の事例をもとに—」
李 文亮(リー・ウェンリャン) 中国国务院、中央国史研究館
- ◇「ミュージアムマネージメントと保存・展示のマネージメント」
アンドレア・サルトーリ イタリア博物館技術研究所

●セッションⅡ プレゼンテーション

- ◇「韓国における博物館発展のための政策的視点」
〈韓国〉崔 錫榮(チェ・ソックヨン) 国立劇場公演芸術博物館長
- ◇「博物館界における中国博物館のイニシアティブ」
〈中国〉安 来順(アン・ライシュン) 中国博物館協会副会長
- ◇「日本における博物館発展のための戦略プラン」
〈日本〉井上 由佳 文教大学国際学部専任講師

●セッションⅢ パネル・ディスカッション

◇テーマ：「ネットワーク構築からネットワーク強化へ 次なるステップを考える」

コーディネーター：高安 礼士 日本ミュージアム・マネジメント学会副会長、全国科学博物館振興財団

パネリスト：崔 錫榮（韓国）

安 来順（中国）

井上 由佳（日本）

コメント：裴 基同（ベ・ギドン） 前韓国国立文化財大学長

張 仁卿（チャン・インキュン） 前ICOM ASPAC 委員長

林田 英樹 国立新美術館館長

●総括

水嶋 英治 日本ミュージアム・マネジメント学会副会長、常磐大学大学院教授

●閉会挨拶

沖吉 和祐 日本ミュージアム・マネジメント学会副会長、東京家政学院専務理事

セッション I

〈基調講演 1〉

博物館・博物館設計・博物館学
研究に影響を与える文化的変化
のインパクト

国際博物館コンサルタント

ゲイル・ロード

本日は、世界各国で博物館等の文化施設の企画を行っている経験から、文化の変化が博物館に何をもたらしたかについてお話しする。

まず最初に博物館とは何であるかを語る前に、文化とはなにかについて考えたい。文化とは人間が自然や社会に対して影響を与え、意味のある変化をもたらすものである。解釈によるが、文化は大きく四つに分けることができる。

1. 物質文化（人が生存のために環境を変えていくこと。食や住居など）
2. 身体的文化（人間の健康や様々な活動に関すること。医療やスポーツなど）
3. 社会・政治的文化（政治・経済等社会運営のためのシステム）
4. 美的文化（人間が理解、鑑賞するために創るもの）

面白いことに博物館はこの4つの文化すべてに関わっている。例えば文化はここ千年で大きく変化した、その千年分の変化を博物館来館者は博物館の中で見ることができるのである。

では文化が変化するのは何によるのだろうか。以下にその事例を掲げる。

1. 知識経済（労働力の量の問題より、生産の専門性やノウハウ、情報等に重要性を見出す経済）
2. 世界市場における競合力をもった労働力
3. 境界を越えて広がる文化の変化
4. 都市の優位性（現在、人類の50%以上が都市に住んでいる。このことから博物館はどうしても大都市中心に建設されることが多い。）
5. 文化観光
6. 通信革命
7. 人権とアイデンティティー
8. 同一文化内の変化

これらはすべて、博物館と博物館に働いている人に影響を与える。では文化の変化が博物館にどのような変化をあたえるのか。ここで六つの側面に分けてお話しする。

1. 組織の変化

過去において政府の組織の一つとして博物館があったが、現在、市民社会の中で独立したものとなりつつある。日本では8割が公営だが、残りの2割が拡大してきていると聞いている。

2. 市場と来館者の変化

博物館数の増加、博物館来場者数の増加。なによりも文化の消費者としての来館者は昔は受け身であったが、今や積極的に博物館に関与するようになった。

3. コレクションの変化

コレクションは過去においては有形遺産であったが、現在、博物館は無形のモノに価値を見出し、有形・無形、両者を扱うようになった。西洋社会にとっては、このような変化は、アジア、特に日本から来たものである。またコレクションは、嚴重に収蔵された状態から、オープンで見やすい、利用しやすい状態になってきた。

4. プログラムとアクティビティの変化

教育活動等について、20年前の博物館は内向きで自分達の機能をどうすべきかを考えていたが、今は外を向き、社会の中で何ができるかを考えるようになった。特にアクティビティについては、昔は博物館は一方的に教えるだけであったが、現在、来館者に意見を言わせて交流をするという、双方向性を持つようになった。

一方で、一般の方々の教育・学習の選択肢は昔は少なかったが、今やインターネットの情報検索も含め様々なものがある。博物館は数多くある教育・学習の機会の中の選択肢の一つとなった。

5. 展示の変化

過去において展示は変わり映えのしないものをそのまま展示していた。しかし今や、展示とは動くものであり、変化するものとなってきた。

6. テクノロジー

博物館は博物館でモノを見せるだけでなく、インターネットを通じて、モノを、情報を提供できるようになった。インタラクティブな情報提供、グローバルな双方向コミュニケーションが可能となった。

博物館の企画をするときは、これらのことを踏まえた上で、人であったり、建物であったり、コストを考えなければならない。ではもう少し具体的に博物館に起った変化についてお話しする。

1. 社会の状況を反映して、カルフォルニアアカデミーオブサイエンスのように今まで展示としては意識されなかった環境・持続可能な社会のようなテーマが博物館でとりあげられるようになった。
2. 収蔵品の保管場所をシースルーとすることで保管資料が見える展示とし、さらにPC端末を設置し、見えるだけでなく、情報提供できるようになってきた。このようにすることで、少ないスペースで多くの情報を提供できる。
3. 経済的に維持していくために、博物館とホテ

ル、ショッピングセンターなど複合施設として空間を使う例がでてきた。

4. 博物館を誰でも利用できる、ハンディキャップのある方でも利用できるようにユニバーサルアクセスを考えた施設となってきた。また、展示自体も、例えば目が不自由な方のために触れる展示を作るようになってきた。
5. 博物館職員は、来館者の前で文化を伝えるためのパフォーマンスができなければいけない。部屋に閉じこもって研究だけしていればよい時代ではなくなった。パフォーマンスを行い、人を引きつけ、自分たちの考えを来館者に伝えることが必要となってきたのである。
6. 博物館は経済活動を刺激したり、観光に寄与することも考えるようになってきた。
7. 博物館でやる仕事は、一人でやる・やれるものから、チームワークが必要なものへ変わってきた。博物館職員はチームワークの重要性を学ぶ必要がある。
8. 博物館の職員は国際的視野を持つ必要がある。博物館はこれから今まで以上に複雑な組織体になっていく。そのため博物館学も含めていろいろな領域のノウハウが必要となる。だからこそ広い国際的視野の中で、学び、考え、物事を遂行していく必要があるのである。

最後に、今後の博物館を考えるということで、図-1を見ていただきたい。ここには博物館の六つの基本的な機能が書かれている。博物館職員にはこれらを覚えてほしいのと同時に、これからの博物館の在り方を考える準備として是非活用していただきたい。



図-1 博物館の基本的な機能

〈基調講演 2〉

ラテンアメリカ圏およびブラジルにおける博物館と博物館学研究の動向

ICOM ブラジル国内委員長
カルロス・ロベルト・フェレイラ・ブランダオ

2013年に国際博物館会議（ICOM）第23回総会がブラジルで開催されることから、今回、ラテンアメリカ圏およびブラジルにおける博物館と博物館学研究の動向についてお話しする。

まずICOM ブラジル委員会であるが、1946年にパリでICOMが設立された2年後、1948年に開設され、60年を越す歴史を持つ。現在ブラジルの法律で委員会の設置が認められている。ブラジル委員会の機能はラテンアメリカ・中南米にある委員会の機能と同じく伝統的なモノをいかに現代にマッチさせ博物館活動を推進していくかである。ブラジル委員会の組織はブラジルが大陸サイズの面積があることから、5つの地域に分かれて活動を行っている。現在ブラジルには約3,000の博物館があり、博物館の専門家は3万人ぐらいである。その中でICOMのメンバーは180人しかいないことから、これから多くの博物館の専門家をICOMにつのり、ブラジル、そしてラテンアメリカの博物館の活性化をはかっていきたいと考えている。そのためにメンバーに次のようなサービスを行っている。

- ・WEBによる情報提供
- ・論文誌、書籍の出版
- ・ICOM 倫理コードのポルトガル語への翻訳、セミナーの開催、ポルトガル語圏への無料配布
- ・博物館の安全性のためのセミナーの開催
- ・ICOMの各分科会、歴史や科学等の各専門分科会と連携したワークショップの開催
- ・ブラジルの博物館と各国の連携

さらに、ICOM ブラジル委員会は国際社会と緊密な連携をとる活動の一貫として、ブラジルを含むラテンアメリカ圏と世界の博物館の懸け橋になることを目的に、2013年に国際博物館会議総会を開催することを提案した。現在の予定では、2013年6月の第一週にリオデジャネイロで開催する予定である。今回私たちが課題として設定しているのは、{Museums (memory+creativity=social change)} である。すなわち記憶 (memory) と創造性 (creativity) を足すと社会変化 (social change) になるという考え方で

ある。そして社会的変化にどのように博物館 (Museums) が対応していくかをテーマとしたいと考えている。

ここにいる皆さんも是非、2013年にブラジルで開催される国際博物館会議総会にご参加いただき、一緒に博物館の未来について考えていただきたい。

〈基調講演 3〉

中国国学研究センターの構想
—社会教育活動の事例をもとに—

中国国務院、中央国史研究館

李 文亮 (リー・ウェンリャン)

中国では国学を扱う中国国学研究センターの建設が現在計画されている。本センターは中国国務院と中央国史研究館が担当し2010年5月から準備が進められている。センターは北京市の北側にある総合施設の一角、オリンピックが行われた鳥の巣競技場、国立水泳センター、国立美術館、国立無形文化遺産保護センター、国立会議場、国立科学技術館などと並んで建設する予定である。今回はこのセンターの構想とその思想についてお話しする。

文化とは国家の精神と魂そのものである。文化は国家発展の方向に深く影響し、国の運命をも変える。どの国でも自国の文化を研究し伝える学術的機構があるが、中国国学研究センターもその一つである。中国の人間主義的精神を特徴とする国学は二千年に渡り中国人が作り上げてきたものである。その固有の考え方は、現代の中国人にも深く根を下ろしている。その思想は人に刺激を与え、特に人間性の発展と平和に関連するものである。これらのことを踏まえた上で私達が国学研究センターを設立する目的は、伝統を前進させるため中国国学の本質を再定義し、人間主義的精神を現代的な視点にしっかりとあてはめ、思想を国際化の動きに則って組み立てていくことである。

中国共産党は中国文化を促進し、中国国家の共通の心の故郷を構築することを明確に打ち出している。国学は中国文化の神髄を入れる入れ物であるのと同時に、伝達をするための道具でもある。中国伝統文化の一番良いところを促進し、新しい国学を披歴するため、伝統を踏まえながら今日の現状と将来を眺めるための組織として中国国学研究センターを考えている。また国際的な交流、中国と他の国々との相

互理解を図るためにもこのような組織が必要である。中国人がどのように物事を捉え、考えるのか、中国人の考え方を世界に示す窓口として機能することもとめられているのである。

私たちの目指すのは新しい文化施設の構築である。単なる博物館を作ることが目的ではない。博物館、図書館、公文書館、研究機関、文化促進機関等の機能を統合し、文化の保護や展示、革新的な考え方の推進役としての機能を果たすのである。組織が対象とする人々は、一般大衆、特に将来を担う若い人達である。それと同時に、本センターは、中国内外の国学研究者を支援し、国学愛好者のための情報と学術的支援も行う。さらに、海外の方々と対話する国際文化交流の土台でもありと考えている。また情報提供という観点では、ITによる情報サービスや、出版、マルチメディア等も充実させていきたい。

中国国学は、博物館の展示物としては無形のものであるばかりでなく時間の経過と共に、常に変化するものである。国学の神髄とは倫理の規範や考え方の枠組み、美的価値と結びついているからである。国学は固定されたものではないことが中国の歴史からも分かる。時々の要請に応じ、他の文化のよいところを取り入れ常に更なる発展をしている。そのためこのセンターは遺跡を中心とした博物館や豊かな収蔵品を誇る博物館とは一線を画すことになる。とはいっても堅苦しい、難しい話を一方的にする場ではなく、知的な友と、国学を軸に自分の個人の話をする場としたいと考えている。

博物館とは国の一番重要なところを表現するものであり、他の博物館、他の文化との交流から国際的に貢献できるものである。その一つである中国国学研究センターは2013年に完成予定であり、アジア各国との博物館と連携していきたいと考えているので是非期待していただきたい。

〈基調講演4〉

ミュージアムマネジメントと 保存・展示のマネジメント

イタリア博物館技術研究所

アンドレア・サルトーリ

私が本日お話しするのは、どのような戦略を持って、美術館を発展させていくかということである。その中で、私達が掲げているテーマは、文化財をいかに保護していくか、展示のための保護であり、それと同時に保護しながらいかに展示して、来館者に見せていくかである。

ここで私が手掛けた仕事の一部をお見せする。これはモナリザで2005年に新しいショーケースに変えたものである（写真-1）。まずポイントとなるのは責任の所在である。どの部分に誰が責任を持つのか、つまり誰が何をやるのかの明確化である。2番目に重点を置いているのは美学である。どのようにして保護しながら展示をしていくか、心理学に考慮してどのように展示と保護をコーディネートしていくかは美術展示を考える上で不可欠の要素である。3番目のポイントは安全である。どのようにモナリザを守るかという視点である。さらには建築物との対応の中で、保護ケースの大きさや構造も重要となってくる。最後はユーザーフレンドリーであることである。これは来館者の方にとって使い勝手がよいというだけでなく、学芸員にとっても管理しやすいという意味で使い勝手がよいということである。

今回は時間がないが、詳細については今年の11月に東京で開催される展示と保護についての会議で報告する予定である。その時には施工方法等、さらに具体的にお話ししたい。ここにいる皆さんも是非11月の会議にご参加いただき、展示と保護の在り方についてディスカッションできればと考える。



写真-1 モナリザ展示ケースの交換

(セッション I 文責)

田代英俊/JMMA特別事業実行委員長・理事)

セッションⅡ

〈プレゼンテーション1〉

韓国における博物館発展のための政策的視点

〈韓国〉(国立劇場公演芸術博物館長)
崔 錫榮 (チェ・ソックヨン)



○韓国の近代博物館の始まりについて
—李王朝博物館—

日本の近代史のなかで啓蒙思想者として大きな役割を果たした福沢諭吉の著書「西洋事情」により、日本の博物館の概念が定義された。その日本の博物館の概念は、日本の政治的影響により、韓国で近代博物館が設立される際に影響を与えている。

1910年、韓国における最初の博物館は、1910年にイワンガ(李王家)によって設立された。イワンガ博物館により、ミュージアムのコレクションの購入が始まり、発掘された遺物の収集など、博物館本来の活動が始まった。

イワンガ博物館は現在、痕跡は残っていない。1990年代に、イワンガ博物館が解体され、1938年にイワンガ博物館の所蔵品を今の徳壽宮(Deoksugung)に移転し、王家美術館として開館した。イワンガ美術館の建物は幸い残り、今は、国立博物館に統合され、活用されている。

○韓国の植民地博物館について —総督府博物館—

総督府博物館は、博覧会の産物と言える。1915年に韓国歴史上はじめて朝鮮物産共進会という博覧会が開かれた。総督府博物館は、博覧会時には美術館だったが、博覧会が終わり、一ヵ月後に総督府博物館と名づけられた。この博物館は全国で行なわれた古跡博物館調査事業で発掘された遺物などを収集し

たり、管理したりする役割を果たしていた。

ただ残念なことに、1995年に政権によって取り壊された。現在は一部分しか残っていない。

韓国の博物館の歩みを知るには、日本の博物館の歴史を知ったうえで進めた方がいい。1926年に発足した日本の博物館協会が日本の近代史の中でどのように位置づけられ、どのような役割を果たしていったのか。その協会が韓国の博物館のあり方にどういった影響を与えたのかについて、論議する必要がある。

湯島聖堂は、日本の近代史上、初めて博覧会が開催され、博物館が開館した場所だ。湯島聖堂は、もともとは、官立の教育機関であったが、近代に入り、湯島聖堂を中心に日本の近代博物館が起こった。ここで言えることは、日本の近代史と韓国の近代社会において、博物館の登場は、博覧会と関係があったことだ。

○地方博物館の運営主体は何か —地方保存会—

朝鮮総督府博物館とともに、地方に2つの分館博物館が設立された。慶州分館と扶余分館だ。これについては、偶然に地方保存会に関連する書類を発見した。地方分館の運営は、朝鮮総督府が主体であったと思う人が多いが、そうではなく、その主体は、地方で活動をしていた日本人と朝鮮人で、彼らは、そこで中心的な役割を果たしていたことがその書類から明らかになった。

私は直接、慶州に行き、慶州分館がどのように歩んできたのかを調べた。今でも跡地を慶州分館が受け継いでいた。

地方では、博物館とともに古跡調査や研究に携わっていた朝鮮人や日本人が中心になり古跡保存会を運営していて、その当時失われつつある遺物の収集ができ、管理ができていた。

ただ、保存が十分でなかった側面もある。その当時、保存体制が整っていなかったため、古跡から発掘された遺物の収集に問題があった。

地方においては古跡・遺物を収集し保管することにとどまらず、それを一般の人に見せるための研修が行われ、扶余には、観光のインフラが既にその当時にある程度、構築されていた。

扶余にも慶州のように保存会があった。その保存会はやはり、日本人や朝鮮人による団体だった。

これらの機関の存在は、国会記録院と言う外部機

関に残された記録から明らかになったものだ。私が発見したのだが、それをもとに韓国の保存会の性格を明らかにすることができた。

○日本からの解放後

解放後に日本の博物館を受け継いで、2つのミッションをもった博物館が誕生した。現在の国立中央博物館の前身である国立博物館は、朝鮮総督府博物館を受け継ぎ開館された。また、日本時代にはなかったが、収集活動の成果に基づき、人類学の博物館である国立民族博物館が開館した。

博物館分野に関する法的措置が整えられたが、植民地解放後、すぐにではなく、ある程度時間が経ってからだった。1984年に、日本では博物館法が制定され60年を迎えているが、日本で1951年に改訂された博物館法からの大きな影響を受けて、韓国で初めて博物館法が制定され、1991年に「博物館及び美術館振興法」と名前を変更し、現在に至る。

人類学博物館であった国立民族博物館は、今は、残念ながら残っていない。韓国の人類学のミッションは、現在、国立中央博物館が担っている。2005年に龍山で新しい国立中央博物館が開館した。

○結論：ミュージアム間のアジアにおける協力

韓国の博物館の歴史に基づき、いくつか提案をする。

- ・アジアにおける博物館の歴史をお互いに研究し、その成果を発表すること
- ・韓国では博物館の専門家をどう養成するか、大学内で養成する方法を探して欲しい。また、アジアにおいて博物館の専門家達をどのように養成し、訓練し、博物館に供給するか。
- ・博物館の経営に関わる標準的なことをまとめ冊子をつくり発行し、情報を共有すること
- ・アジアにおいてお互い興味の深いテーマで展示をし、それをアジア各国で展示すること
- ・博物館専門誌を発行し、お互いに交流の場をつくっていくこと

〈プレゼンテーション2〉

博物館界における中国博物館のイニシアティブ

〈中国〉（中国博物館協会副会長）

安 来順（アン・ライシュン）



○中国博物館の発展と国際化

1990年代以来、中国は経済成長期にあり、博物館数が急速に増加する。2010年の博物館総数は、3,079だ。そのうち2,212の公立博物館は文化遺産行政機関に関連をする。499は、その他の公共団体で運営しており、残りの328は民間の博物館だ。改革開放政策が実施された1978年から数が9倍になった。最大の伸びは2006年から2010年の間である。過去3年間に年間100以上の博物館が設立、または開館している。

2010年の例では、文化遺産システムの博物館だけで、284万件が新たに収蔵され、1万以上の展示が一般公開されている。統計では2008年～2009年に中国の博物館には、延8億2千万人が来館したことが分かる。

現在の中国の博物館発展にいくつかの主なトレンドが見られる。

1. 特別なテーマ博物館が主流となっている
2. 博物館スポンサーがますます多様化している
3. 遺産の新しいコンセプトを積極的に探り、かつ実践している
4. 博物館の社会的機能が肯定的に捉えられるようになった
5. 2008年に入館料の無料が実施され、来館者数が増えるとともに多様化してきている。2010年までには、1,743の公立博物館が無料化・一般公開され、国内全博物館の77%を占めるようになった。

海外の博物館との交流では、中国の博物館は400件以上の国際交流展示を2006年から2010年の間に実

施した。また過去5年間に文化財の密売と戦うための覚書を12カ国との間で調印をしている。

中国政府は韓国・日本・イタリア・アメリカと協力し、多数の国際セミナーやワークショップ、会議等を開催し、また博物館専門家の直接参加による文化遺産協力プロジェクトをカンボジア、モンゴル、ケニアで実施した。

○戦略的方向性：調和の取れた社会的発展への貢献

ICOM 2010年での上海宣言は「調和のとれた社会開発のための博物館」で2010年11月12日のICOM総会の決議案1号として採択された。

調和のとれた社会の発展のためにもっと積極的に建設的な役割を博物館が果たすならば、世界にとって深く共鳴するコンセプトとして評価されるに違いない。

上海宣言での提言をアジアにおける博物館協力推進のためのツール、およびガイドラインとして私は推奨したい。

ICOM倫理規定のなかで、博物館の倫理的責任には、以下のものがある。

- ・博物館は人間性の自然遺産と文化遺産を保存し、解釈し促進する。
- ・博物館は、自然遺産と文化遺産を鑑賞、理解、管理する機会を提供する。
- ・博物館は、その他の公共サービスと公益向けの機会を提供するためのリソースを保有する。
- ・博物館は収蔵物の出所であり、サービスを提供する対象である地域社会と密接に協力をする。

次いで、1998年のユネスコ世界文化報告を再確認する。

文化財の幅と多様性、生物多様性と文化多様性、及び有形遺産と無形遺産とのつながりを促進する進行中の作業を再確認すること。

- ・様々な背景をもつ個人やグループを含む強い社会を構築するために社会的・文化的慣習への認識と敬意を助長すること。
- ・寛大さや思想の自由、良心と信念を持ち、博物館の知識を誰でもが利用できるよう努めること。
- ・異文化間の意識向上のため、及び国家間の情報に通じた関係づくりのために国際情勢のなかで今日、博物館が果たす役割は、ますます重要となる。
- ・異なる人々や文化、知識形態の相互の交流にプラットフォームを提供するために技能や能力、

協力の新しいモデルを博物館が育てること。そのニーズの高まりを重要視すること。

○具体的な取組み：

ICOM博物館研究国際センター＝ICOM-ICMS

ICOM-ICMSは、上海宣言の枠組みに基づき、遺産と博物館分野の専門家の協力を得て取組みを進めることが可能だ。ICOM博物館研究国際センターの協力は、重要な道のりの一つになり得る。

ICOM中国は、このセンターが実施する事業に人材や施設、経験という面で協力をしたい。地方と国際的専門家グループは博物館と文化遺産の分野で専門的な知識を提供し、当センターを支援することになっている。

(セッションⅡプレゼンテーション1・2文責)

高橋信裕/JMMA副会長・理事、
山城弥生/文化環境研究所)

〈プレゼンテーション3〉

日本における博物館発展のための戦略プラン

文教大学
井上 由佳



本発表では、国際的な観点から見て、今日の日本の博物館の持ち合わせている強みと弱みをそれぞれ三点指摘した上で、今後の更なる日本における博物館発展を促すための戦略プランを検討したい。

日本の博物館の強みとしては、まずインフラ・ハード面が整っていることである。日本には国公立・私立を合わせて5,700館以上のミュージアムが全国各地にある。その多くは建物をはじめ収蔵庫などの諸設備が(程度の差はあれ)整備されている。これは

先進国以外の国々におけるミュージアム事情、例えば一国に2～3館しかミュージアムがないといった状況と比較すれば、大変に恵まれているといえよう。また、国際的にも高いレベルの保存修復技術を有していることがあげられる。

二つ目の強みとしては、ミュージアムの研究環境が整備され、大規模館や新設館では最新の技術を表示等に導入していることである。国立国会図書館の雑誌記事検索データベースによれば、少なくとも全国で約1,400もの紀要・報告書が博物館等によって定期的に発行されている（2011年2月時点）。必ずしも恵まれた研究環境とは言えないかもしれないが、この事実から学芸員による収蔵資料等に関わる調査研究が継続的に行われているといえよう。そして、企業を中心とする産業界といくつかの博物館との連携が実践・研究面で見られることにも注目しておきたい。東京お台場にあるパナソニック・デジタルミュージアムのRisupia（リスूपピア）や東京国立博物館と凸版印刷によるミュージアムシアターなどがその好例である。このような最新技術をミュージアムの現場に活かす試みは、日本の強みとしてアピールできよう。

三つ目に、日本のミュージアムが多種多様なコレクション・テーマからなる館で構成されていることを指摘したい。歴史系博物館が60%近くを占めているとはいえ、美術、科学、自然史、民族など、その扱うテーマは非常に幅広い。民族学の事例をあげると、北海道のアイヌ民族博物館などがある。日本のミュージアムは、人文科学・自然科学といった学術的な内容のみならず、オルゴールやおもちゃ、食べ物といった身近なテーマを扱う館まで、その内実は多様である。

次に、日本のミュージアムの弱みとして一つ目にあげたいのは、予算削減に代表される財政問題と効率的なマネジメントの欠落である。近年、公的予算頼みで館を運営していくことが極めて厳しい情勢になっている。民間財源の少なさもこの状況を難しくしている。また、効率的なマネジメントを実現し、安定した運営状態にある館が少ないことも問題といえよう。

二つ目に、統計データにおいて来館者の減少が見られることから、来館者層の拡大がまだ不十分であることを指摘したい。文部科学省がまとめた『平成20年度 日本の博物館総合調査研究報告書』によれば、過去10年の間に全国レベルで来館者数の減少が

見られる。また、この報告書で調査対象となった全国の2,257館のうち、年間来館者数が50万人以上の館は3%と極わずかであり、26.5%の館が5,000人以下、23.7%の館が10,000人以上30,000人以下という数値が上がっている。この数値から明らかなように、館の集客力の格差は歴然としており、このことから、さらなる来館者層拡大の必要性が認められる。そのためには、なぜ来館者数の経年減少が見られるのか、来館者数が少ないのはなぜなのかを検討する必要がある。さらには、どの層に向けてより情報発信が求められるか、市民のニーズはどこにあるのか、来館を阻むハードルは何なのか等をきめ細かく分析し、適切な対策を効率よくとっていくためにも、継続的な来館者調査が望まれる。

三つ目として、努力はみられるとはいえ、まだまだ国内外のミュージアム間のネットワーク構築が不足していることを指摘したい。アジア諸国との合同会議やICOMを中心とする活動など、近年、日本から海外に働きかける国際的な動きが見られるようになってきた。しかしながら、まだ、国内レベルにおいても、情報共有の機会は限られており、例えば優れた事例から館運営などを学ぶチャンスは少ない。特に館種を超えた交流の少なさ、例えば美術館をテーマに扱う会合に歴史系・科学系の人ほとんど来ない、その逆もしかりという現状など、館種ごとの溝はいまだ厳然として存在する。テーマ、設立基盤の違いはあれども、ミュージアム「仲間」として相互に認識し、情報共有し、協力し合う関係＝ネットワークの構築が国内そして国際間で求められているのではないだろうか。

最後に、こうした現状の考察をふまえ、さらなる発展のための戦略プランとしてあげたいのは、①国内外の館運営の成功事例を共有し、そこから学んでいくこと、②観客層の拡大とニーズを汲んだプログラムの開発と来館者調査を実施していくこと、③館種や扱う分野、官民といった組織の壁を超える、より強いネットワークを構築していくことである。

ここで指摘した三点について、既に取り組んでいる事例もあるだろう。しかし、それに満足することなく、さらなる発展を目指し、海外からも注目されるようなムーブメントにつなげていくことが望まれているのではないだろうか。それに向けた努力が日本の博物館発展をさらに推し進めてくれるに違いない。

セッションⅢ パネル・ディスカッション

テーマ：「ネットワーク構築からネットワーク強化へ
次なるステップを考える」

・コーディネーター：

高安 礼士 日本ミュージアム・マネジメント
学会副会長（全国科学博物館振興
財団）

・パネリスト：

崔 錫榮（チェ・ソックヨン）〈韓国〉
安 来順（アン・ライシュン）〈中国〉
井上 由佳〈日本〉

1. プレゼンテーションに関する補足説明

■崔 錫榮（韓国）

韓国には博物館政策に携わる機関がなく、専門家の養成や博物館政策を適正な方向に導いていく議論がなされていない。アジアの博物館の専門家が集まり、深く論議し、アジア各国だけの博物館政策が進むのではなく、お互いに良い方向へ向い、良い成果を挙げられるよう、協力したい。

■安 来順（中国）

中国では博物館が急増したが、質の点で問題がある。また、地理的に偏りが見られ、北京・上海・広州に多い。運営予算は、過去5年の間に6倍になったが、文化財保全、観光振興などその予算の用途や管理について定まっていない。

中国には多くの私立博物館があるが、私立博物館を対象とした法律がなく、その整備が急がれている。

■井上由佳（日本）

日中韓の間で、人材交流が若手のレベルまで幅広く行なっていくべきだ。職員を一年間交換し、人対人のベースが構築できれば、さまざまな問題へ対応することができるのではないかな。

博物館の専門家の養成については、年間約1万人が、学芸員資格を取得し卒業しているが、ミュージアムキャリアを築いていくチャンスが無いのが現実だ。

2. 自国の博物館機能の充実策と可能性について

■安 来順（中国）

中国ではマイノリティ（少数民族）のコミュニティを「エコミュージアム」として取り組むプロジェクトが注目されている。経済の成長に伴い起って

くることだが、社会的な調和というものを大切にし、それを一つの特徴にしていくということ、これが今後、実施していくべき課題である。

■井上由佳（日本）

ミュージアムを生活の一部として取り込んでいく市民の意識、そういう意識を一人でも多く育てていかなければならない。

大学で学生に博物館視察を課題にしている。大学生にミュージアムが面白くなってきているということを感じてもらうことにより、仲間や家族とともにミュージアムを訪れる機運を高めていく。そういったメッセージを地道に伝えていくことで、ミュージアムのサポーターを増やすことが出来るのではないかな。

■崔 錫榮（韓国）

博物館にイデオロギーや予算拡大、再生産の空間という役割を課すならば、一般の人々のイメージから、乖離し否定的反応が出てくると思う。

最近、西洋が博物館の教育機能を強化しているが、そのことを強調すればするほど、博物館はイデオロギー的空間になりがちだ。博物館をもっと楽しめる総合的・文化的機関と位置づけるならば、視点を変えてグローバル的視点が求められる。

3. 日中韓3カ国はそれぞれ何をすべきか。

○日本から中国への助言・提案

■井上由佳

ヨーロッパの子ども達からは日本も韓国も中国も区別が付いていない。中国のミュージアムにはアジアの文化を他地域に表象するにあたり、モデルをつくっていただきたい。単にエキゾチックだとか珍しいとかミステリアスだとか、そういったイメージではなく、伝統的な、また現代の姿もミュージアムを通して伝えて行っていただきたい。

○中国から韓国への助言・提案

■安 来順

上海でのICOM国際博物館会議で無形文化財のことが触れられた。包括的な無形文化財に対する知識の点で韓国は、地元根付いている。こうした韓国の知識を他のアジア諸国と分かち合う機会を増やすことを期待している。

○韓国から日本への助言・提案

■崔 錫榮

日本では国立の博物館が独立行政法人化された。公立博物館についても指定管理者制度により法人化されている。韓国でもソウル大学を法人化することが決定した。日本での法人化の長所と短所についてアドバイスを頂きたい。

○日本から韓国への助言・提案

■井上由佳

日本は、ある意味、法人化先進国なのかも知れない。法人化したことによる長所と短所を第三者的な立場から評価することが必要だ。その評価を受けて広く情報公開をしていく必要がある。

4. 基調講演の講師からのコメント

■ゲイル・ロード

韓国の博物館の案件で5～6件、仕事をしている。北京にもオフィスを持っている。中国は、博物館に短い期間大きな投資をした。そのためにたくさんの博物館が出来ている。だが日本の人口比に比べると中国の博物館数はまだまだ少なく、ペースは遅すぎると思う。

日本の博物館が世界をリードしている点、それは建築家だ。世界的に有名な建築家がいる。もう一つは技術的なものだが、博物館における技術は韓国が日本より先を行っていると思う。

■カルロス・ロベルト・フェレイラ・ブランダオ

多くの国の人々がそれぞれ異なる歴史や文化をどのように一体化し、共有化していくのか。博物館が調和のとれた発展をしていくために、皆がお互いに協力し協議をすることにより、実現すると思う。

5. フォーラムに参加した3名のコメント

■裴 基同 (ベ・ギドン) 前韓国国立文化財大学長

課題の一つは、学芸員の処遇で、現在150人くらいの若い私立博物館の学芸員が政府から支援を受けている。公立の博物館ではない。

「社会との調和」が上海ICOMでのテーマであった。今、博物館は、「文化の虹」になるべきである。様々な文化や違った色が融合し調和することが、虹に象徴されている。

我々が直面している問題は、博物館利用者が一部の人々であることだ。そのため社会の様々な分野の

人々を取り入れる戦略を取っており、観光、旅行関係者との連携協力を強め、戦略の強化を図っている。また学校教育との連携協力、社会福祉に従事するソーシャルワーカーとの協力も重視して取り組んでいる。これらのコンセプトは、アジアだけに留まらず、国際社会と協力していく点において非常に重要だと考える。

■張 仁卿 (チャン・インキュン) 前ICOM ASPAC委員長

2002年に上海憲章が発表され、2009年に東京宣言があった。韓国が今直面している問題は、博物館関係者に戦略がないこと、専門職に対する定義がないこと、誰が主要な役割を演じ、担っていくかがはっきり決まっていないことだ。未だに、韓国の博物館学は考古学の人々が主導権を握っており、発掘と収集が中心になっている。この関係者が周りの意見を聞く環境にない。最後に強調しておきたいのは、専門職員の研修が非常に重要だということだ。

■林田英樹 国立新美術館館長

アジアのなかで日本は博物館・美術館について長い経験がある。専門的な職員も多い。アジア全体の博物館の活動を改善するために協力していきたい。

アジアでアートミュージアムダイレクターズフォーラム(美術館館長会議)を既に5回開催し、交流している。これまでは、お互いを知り合い、親睦を深めることが中心だったが現在では具体的にどんな協力ができるのかを考える段階に来ている。

ICOMは従来、西洋を中心に作られたものだ。我々アジアの状況から見ると必ずしも我々の関心と一致しないこともある。次回はブラジルで開かれるが、もっと世界的な活動になっていく努力をお願いしたい。

(セッションⅢ文責)

高橋信裕/JMMA副会長・理事、
山城弥生/文化環境研究所)

アジアにとって新しい博物館哲学を考えよう

・・・アジア博物館フォーラム総括・・・

日本ミュージアム・マネジメント学会副会長
常磐大学大学院教授

水嶋 英治

「アジアにおける新しい博物館学研究の発展を考える」をテーマに開催されたアジア博物館フォーラムを評価すれば、近隣諸国との博物館学研究の協働インフラとして（歩みは遅いが）着実に一步一步階段を上っている、と評価できるのではないかな。

大堀会長をはじめとして、栗原理事の献身的なリーダーシップは国際影響力の少ない我が国の博物館界に一条の活路を見いだしている。沖吉副会長の有益な助言、堀副会長のバックアップサポート、まとめ役としての高安副会長の役割、高橋副会長の中国・台湾・韓国との橋渡し役、膨大な事務局作業をテキパキと処理する縁の下津久井さんの仕事ぶり、これらが一丸となって機能しているところにJMMAの強さがある。この協力態勢をさらに強靱にするべく、博物館の国際戦略、そして言うまでもなく本来の目標である博物館学の研究推進、協働的研究体制構築に向けて努力していきたい。

以下、第3回アジア博物館フォーラムとして総括しておく。

アジア博物館フォーラムの小史

ここで少し振り返ってみると、韓国博物館協会の前会長であり前韓国国立文化財大学長（現、漢陽大学教授）裴 基同（ベ・ギドン）氏やICOMアジア太平洋地域連盟（ASPAC）の前会長（現、鉄の博物館館長）張 仁卿（チャン・インキュン）氏等が2007年から毎年のように来日し、協働研究や日韓の博物館活動の促進について提案され、JMMAも積極的に協議に参画してきた。2008年2月には日中韓の博物館関係者が東京国立博物館に集まり「アジア博物館円卓会議」を開催した。2009年2月には「アジア博物館フォーラム」を開催、2009年12月にはICOM-ASPAC日本会議の開催に至った。このときにまとめたのが東京宣言である。昨年2010年11月にはICOM上海大会が開催され、アジアの博物館連携に弾みをつけた。そして今年（2011年）2月20日、第3回目のフォーラムが開催されたのである。この種の事業

を毎年継続的に進めることの困難さは筆舌し難いが、文部科学省や文化庁からの支援もあり何とか続けることができた。

日本では、博物館行政や学会、関連の協会が混然としているが、それはまだ明確な分化、役割分担がなされていないため、もう少し国際発言力の強化や国際化が進展すれば、学会としての役割や協会としての役割などがはっきりしてくることになるだろう。

博物館研究ネットワークの設置提案

さて、多くの識者から指摘を待つまでもなく、我が国の博物館学研究は欧米に比べて20-30年遅れているようである。多くの博物館研究者は、欧米に「追い付け追い越せ」とばかりに、北米・欧州諸国の博物館先進国に出かけ、情報を収集し、博物館行政・教育・展示等のシステムを導入し、分析・研究してきた。過大評価と過小評価、模倣、事例紹介、日本のオリジナル的研究とは言えない博物館研究が堂々とまかり通ってきた、と言ったら言い過ぎであろうか。勿論、これらは批判されることなく、むしろこうして博物館研究が時代とともに発展してきたのだから、先人たちの努力に敬意を表すべきものである。どのような学問にも黎明期があり、萌芽期があるように、外国追従型研究の経緯をたどるものである。

しかし、欧米の博物館システム、もっと広義に捉えれば、歴史的背景、社会的文脈が異なる博物館行政や文化政策も根本的に異なるのであるから、我が国の博物館の在り方、教育システム、あるいは運営スタイルも、再度足元から見直し、ないしはアジア全体像の中から捉えなおす必要がある。我が国も独自の博物館研究を始めるべきではないか…。

共時的に韓国中国台湾からの提案は、まさに我々の発想も欧米からの脱却を目指し始めている共通の課題と言えるのである。「時代の流れ」というものであるだろうか、韓国・中国・台湾の研究者から日本の博物館の関連学会に幾つかの提案があったのは、そのことを裏付けている。

継続的に、また定期的に、「アジアにとって博物館とは何か」、「アジア的な博物館学とはどのようなものか」という本質根源的な問いを、お互いに共有し、議論する場を設けてはどうか、という提案であった。

非公式会合を含めればもっと回数は多いが、私たちも積極的な提案をして、実務者会合を東京（2009年12月）、台北（2010年5月）で二回ほどもった。一時的なフォーラムという形式から、常置的な「博物

館研究ネットワーク Museum Studies Network」を創ろうと、第三回アジア博物館フォーラムの開催前日、「亜細亜博物館連携強化3ヶ国6人会（第一回発起人会）」を北の丸公園の科学技術館で開催し、中国・韓国・JMMA幹部が協議した結果、以下のことについて合意を得た。以下は決定事項であるのでここに報告しておきたい。

決議事項

①名称

Museum Studies Network（博物館研究ネットワーク、博物館研究ネットワーク）。当面は日中韓の3ヶ国で進めるが、後にこのネットワークを拡大させる。略称はMSN。

②使命（Mission statement）

アジアにとっての新しい博物館哲学（This Network will advance Asian museum philosophy）と将来の博物館のための博物館学研究（and develop museum studies for future museums）のために、

- 1) 博物館活動に関する思想、情報、出版物の交流を通して質的向上を図る Enriching exchange of ideas, information and publication relating museums activities.
- 2) 博物館の総合的学術研究を促進させる Promoting of Academic researches and synthesis of museums
- 3) 将来の博物館のために若い世代を教育する Educating new generations for future museums

③会員構成は、個人会員（Individual member recommended by each country）を基本とする。理事は9名とし、各国から3名の理事を選出する。（9 Board members: from 3 members from each country, Board members elect chairperson among them）

④2012年を目途に第一回の「博物館研究ネットワーク Museum Studies Network」総会を日本で開催すること。組織は、JMMAをはじめとする日中韓の博物館関係者で構成する実行委員会委員会によって推進させる。The 1st general assembly will be held in Tokyo, Japan, in 2012

結語

フォーラムという形式から一步前進させ、東アジア、さらにはアジア全体の博物館研究発展に寄与できればJMMAのリーダーシップを果たすことができるであろう。さらに原点に立ち返って、本来の目的である博物館学研究、ミュージアムマネジメント研究の協働インフラが整備されていくことになる。

変換点…前向き思想的に表現すれば、原点からの再スタート…に至った今日、アジアの博物館学構築・強化のために、研究者間のネットワークをさらに大きく、絆を確かなものにするべく、研究を推進できる環境整備に努めなければならない。博物館研究ネットワーク（MSN）が博物館学研究者の「核」になるよう、関係者の協力・力添えを願うものである。

（参考）

亜細亜博物館連携強化3ヶ国6人会（第一回発起人会）出席者

裴 基同（Prof. BAE）前韓国博物館協会会長、前国立文化財大学長
張 仁卿（Ms. Chang）前 ICOM-ASPAC 委員長
安 来順（Prof. An）中国博物館協会副会長
大堀 哲 JMMA 会長 長崎歴史文化博物館館長
JMMA 副会長 高安礼士、高橋信裕、水嶋英治
陪席 栗原祐司、田代英俊

論考・提言・実践報告

ハワイ王国の象徴の展示： ビショップ博物館コレクション より

秋山かおり

はじめに

ハワイを訪ねる日本人が後を絶たない今日、ハワイの代表的な衣服と聞いて、羽根細工を思い浮かべる人は少ないであろう。もっともそれを着用する行為は、かつて一部の王族にしか許されない特権であったので、現在は日本的にいうと「重要有形文化財」のように然るべき場所に保管されている。その一部は、ホノルル市にある(財)バーニス・パウアヒ・ビショップ博物館(Bernice Pauahi Bishop Museum; 以下ビショップ博物館)で展示されている。これから述べることは、このビショップ博物館のコレクションのなかでも羽根で装飾された伝説的なサッシュとその展示についてである。その「リロアサッシュ」と呼ばれる衣装は、過去において何度か展示されてきたが、2009年8月5日のハワイアンホール改装オープン以来、2011年6月現在まで初となる長期間の展示がなされている。そして現在、その保存のために展示から取り下げる計画が進行中である¹⁾。本稿では、ビショップ博物館が展示しているハワイ文化のひとつの象徴であるリロアサッシュについて紹介し、その展示までの歩みと方法について筆者の体験報告を交えながら、展示を通じてリロアサッシュを中心にそのモノのもつ意味について考察を試みたい。

1 リロアサッシュとはなにか

(1) リリウオカラーニの保管

ここでいうサッシュとは、長い帯状のものを指すが、ハワイの男性の腰衣であったマロ(malo)とは違う用途と仮定する。ここで取り上げる歴史に残るかつての王ウミ(Umi)の父親として伝えられるリロア(Liloa)のサッシュが、カラカウア王(Kalaka'ua, 1836-1891)に託されるまではどこにあったかは定かではない。ただ兄カラカウア王からサッシュを受け継いだリリウオカラーニ女王(Lili'oukalanani, 1838-1917)はことさら大事に保存していた。彼女はそれを缶に入れてベッドの下に置いていたといわれている。女王が長くハワイを離れる時は、サッシュを執



写真1 1890年のワシントン・プレイス

事のコロネル・イアウケア(Colonel 'Iaukea)がビショップ銀行の金庫室にあずけ、確実に彼女がハワイに帰ってくるとわかっている時にだけ、サッシュは彼女が暮らしていたワシントン・プレイス²⁾(写真1)の寝室に戻されるという徹底した管理ぶりだったことは、ホルトやローズなどのハワイ史に詳しい研究者が記している(Holt 1985; Rose 1978)。リリウオカラーニの貫いたこの保管への姿勢が、後世までこのサッシュが残った要因のひとつであろう。しかし彼女はこのサッシュが王族の神聖を表すものと信じていたから厳重に保管したのだろうか。猿谷(2002)によると、彼女は姉バーニス・パウアヒ・ビショップ(Bernice P. Bishop)をととても慕っていたという(p.102)。その姉の遺言によって建てられたビショップ博物館に1910年、リリウオカラーニはリロアサッシュを寄贈している。

(2) カメハメハの像

ホノルル市のキングストリートとパンチボウルストリートの交差する場所に1882年に建てられたイオラニ宮殿('Iolani Palace)がある。その正門から道路を挟んだ向こう側に立っているカメハメハ1世(Kamehameha I)の像の周りには、しばしば観光



写真2 カメハメハ一世像 筆者撮影

客が集まり記念撮影をしている光景がみられる（写真2）。この像は当時ボストンに在住していたトーマス・R・グールド（Thomas R. Gould）によってクックのハワイ発見100周年を記念して1880年に作られた³⁾（ローズ 1978 p.41）。

ハワイではこれほどよく知られている像であるが、彼の身につけているマントの下の左肩から掛けられ胴から背中に回している帯状のものが、正装であったことはあまり知られていないのではないかと。

この衣装はヘルメット、マント、サッシュと全て羽根で装飾されていたもので、王だけが着用する事を許されていた、いわば戦いの正装としての民族衣装である。例えば羽根のマントは、サイズや柄などがそれぞれの王ごとにしつらえられ、制作にまつわるエピソードが一層、王の権威を強調した（ローズ 1978 p.40）。ビショップ博物館には代々の王の羽根のマントが肖像とともに展示されているが、羽根のサッシュはひとつしかない。それはそのようなサッシュはハワイでひとつしか現存していないからだ。つまり、王冠と同じ君主を象徴するサッシュが「リロアサッシュ」なのである。

(3) 伝説

ハワイの社会では、長らく文字を持たなかったためリロアが登場する歴史書は残っていないが、彼にまつわる伝説が伝わっており、ハワイ島を初めて統合したとされる大王ウミの父親として登場する。後藤（2002）の集めたハワイの神話を要約すると、リロアが身分の低い女性を見染めて生ませた子供がウミで、父の死後、正妻の子ハカウから逃れて隠れ住んだワイピオ溪谷でひとりの娘と結婚するが、畑仕事などはしなかったという。しかし、ある日それを不満に思った義理の父母に勧められて漁にでてみると才能が開花し、ウミは捕れたカツオを洞窟の軍神クーに捧げるようになる。すると虹が洞窟から現れ、それを見て出会った神官によって教育されたウミは、後に過酷な治世をしていた兄ハカウを倒す、という話である（p.201）。

この伝説は、リロアが残虐な子供と力強い子供を生ませた王であり、また彼の血を引くウミはいくら隠遁していても、父から強力な遺伝的「力」を受け継いでいたことを示している。いずれにしてもリロアの強さを物語るものである。

また、ウミの直系の子孫が同じくハワイ島出身のカメハメハ一世とされており、1795年にハワイ諸島をほぼ統一したカメハメハ一世は、ハワイ島の王の

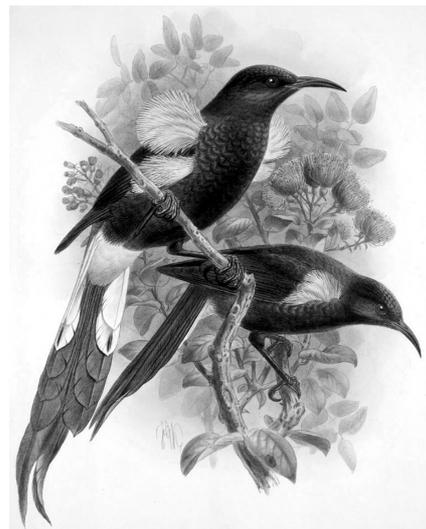
系譜を引き継いだウミから数えて10世代目の王であるという（後藤 2002 p.202）。

(4) 物質としての存在

リロアサッシュについて歴史と伝説を振り返ったところで実質的な考察に移りたい。ここでは、リロアサッシュともう一本同時に展示されているサッシュについて比較することで本来のリロアサッシュの文化的存在理由を探ってみたいと思う。もう一本のサッシュは固有名詞も伝説もわかっていないので、収蔵先のビショップ博物館の登録番号を用いて、この稿では「サッシュ6921」と呼ぶ。なお、このサッシュはビショップ博物館の記録では、1893年にハワイ暫定政府からビショップ博物館に移されたという経緯をもつ。

まずサッシュを構成している原材料だが、ハワイ語でオロナ（O'lona）とよばれる蔓科の植物の皮、3種類の鳥の羽根、人間の菌、そして魚の菌である。

赤い羽根はハワイ語ではイイヴィ（i'iwi）という名の鳥 *Vestiaria coccinea* から採集された。この鳥は現在準絶滅危惧種だが、ハワイでは野鳥として親しまれている。そして黄色の羽根は固有種のオオ（'o'o）と呼ばれた鳥 *Moho nobilis* とマモ（mamo）と呼ばれた鳥 *Drepanis pacifica* のものでいずれも絶滅種である⁴⁾（図版1 オオ）。



図版1 Male and female *Moho nobilis* by John Gerrard Kaulemans

次にリロアサッシュの構造だが、ローズが1978年に詳細な実測データを記しているの以下に参照したい。

リロアサッシュの長さは360cm、幅は14~16cmとされている。赤いイイヴィの羽根が主に使われ、黄

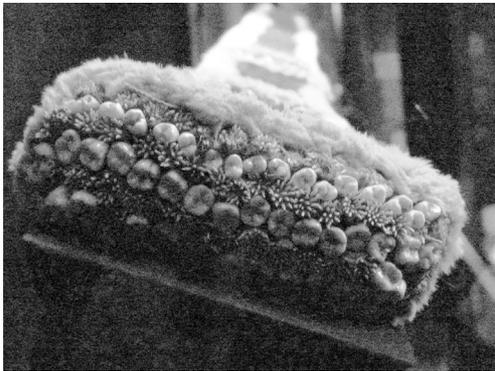


写真3 リロアサッシュ装飾部 筆者撮影

色のオオの羽根で縁取りがされている。おそらく腰から垂らしたであろう「たれ」の部分約100cmに3分割されたデザインが有る。その末端の装飾部は約8cm幅で約8cmの厚さ、3列の奥歯がそれぞれ13本、16本、17本と並べられ、奥歯の周りには、魚の歯が数本ずつオロナの植物鞣皮で巻かれて、地に縫いつけられている（写真3）。そこから40cm上には、オオの黄色い羽根で装飾された縁取りがあり、そこには8本の小白歯と2本の奥歯が留められ、その裏側の同じ位置に4本の奥歯が留められている。

さらに、40cm上には同様に黄色の羽根の4cm幅の縁取りがあり、13本の小白歯が表に、そして10本の奥歯が裏側に留められている。それらの歯は対照になるようにアレンジされて配列されている。もう一方の端については特に目立った装飾はないが、そのスタイルについてローズは片側に装飾のないタイプはタヒチの羽飾りのサッシュに見られるとの見解を示している（pp.25-25）（写真4）。



写真4 リロアサッシュ両端 リアン・イケモト撮影

では次に、サッシュ6921の構造と状態を比較のために、再びローズの記録を引用したい。まず、長さが365cmで幅が14~16cmとなっている。オロナ2本縫りで編まれている地は硬く、ひとつの編目は伸びずと約2mm四方だが、8~10mm間隔に横軸として2~3本縫りのオロナ繊維で全体が縫われている。この横糸でかつて羽根がついた鳥の皮の薄片を留め

ていたと思われるが、この手法は古く、ハワイでは18世紀以前のモノにみられるという（p.22）。ところがこの技法についてはあまり知られていないようだ。ハワイの工芸を研究したヒロア（Hiroa）は、一般的なハワイでの羽毛の縫い付け方として、羽柄を繊維や紐に絡めておく図解を主に残している（1957 p.216）。

サッシュの長い両辺には紐が3~5cm間隔で2本縫りのオロナで縫い付けられている。この紐の中心は3本縫りのオロナで、それを何本もの2本縫りのオロナで作られたサヤのようなもので包んであり、黄か黒色の羽の羽柄の部分を巻いていたとローズは推測している。特記するが、このサッシュの両端には人間の歯が一行にならんで装飾として付けられている。それぞれの歯は穴を開けられ、糸を通すようになっている。一端には12本の奥歯と3本の小白歯が、もう一端には10本の奥歯と1本の小白歯が残っており2本縫りのオロナで付けられている。

では、このサッシュに羽根模様はあったのだろうか。前掲の羽根の塊を横軸に走る糸で縫い付けていった技法で作った模様を復元する試みがあった。かすかに残っていた黄と黒の羽が大きなXの線上にあったことや、羽の色ごとに縫い付けに使われた技法の違いが浮き彫りになり、模様の復元図ができたという。1920年頃、ジョン・F・G・ストークス（John F. G. Stokes）が、この復元図を制作している⁵⁾。以上ローズのデータからサッシュ6927の実測観察を記した（1978 pp.21-22）。

このような一見特異な形のサッシュは実はハワイで発展した形ではなく、その起源はタヒチにあるという（ホルト 1985；ローズ 1978）。タヒチのそれは同様に赤と黄の羽根で装飾され、首長達から取られた歯と魚の歯が両端にあり、オロナで織られた約300cmのサッシュは生まれながらの栄光とステータスを示す物だったらしい。ただタヒチのモノは抽象的なシンボルが描かれているが、ハワイのモノにはみられないという（ホルト 1985 p.161）。

(5) 年代測定

2006年からビショップ博物館では、ハワイアンホール改装プロジェクトに先行してリロアサッシュの年代測定を国外の研究者に依頼している。イギリスのオックスフォード大学内の考古学研究所（Oxford Radiocarbon Accelerator Research Laboratory for Archaeology）において、リロアサッシュから抜け落ちた羽根の年齢がデビット・チバール（David

Chivall) 博士により測定された。放射炭素年代測定法はこの羽根が95%の確率で西暦1402年から1447年の間に採集されたものだという結果を残した⁶⁾。

一方、イギリスのカンタベリー市にあるケント大学デュレル保全生態学研究所 (Durrell Institute of Conservation & Ecology) では、リロアサッシュの羽根について別の角度から調査が行われ、生態系保護の専門家ジム・グルームブリッジ (Jim Groombridge) 博士は、興味深い指摘をしている。グルームブリッジ博士は、2006年4月にビショップ博物館を訪れた際に持ち帰ったイヴィの羽根からリロアサッシュを作るために使われた鳥の個体数をあらためて算出した。すると、当初考えていた数をはるかに上まわり、その数は当時のハワイで一度に存在する鳥の個体数からとても採集できる量ではなかった。この見解から、グルームブリッジ博士はこれらの羽根は数世代あるいは数十年かけて集められたのではないかという仮説を立て、彼は、サッシュの作り始めの部分と終わりの部分からそれぞれ取った羽根でその年代の開きを測定してみてもどうかという提案をビショップ博物館側にしている⁷⁾。一方、ビショップ博物館の方では、抜け落ちた羽根に関しては年代測定を依頼したが、故意にサッシュから羽根を抜き取って鑑定には出す方針はないとの姿勢を貫いている⁸⁾。

2 展示準備

(1) ラボでの修復作業

構想に10年以上かかったハワイアンホールの改装というビショップ博物館にとっての一大事業が2006年8月から2009年8月まで施工され、その間ハワイアンホールは閉館となったが、それはリニューアルオープンとして全ての展示が新しくなる期間でもあった。その準備の一端として、展示予定資料は選ばれ、保存修復され、どのように展示するかが準備されていた。リロアサッシュとサッシュ6972も例外ではない (写真5)。ここでは、筆者が保存修復作業と展示設営に携わった経験も含め報告する。

展示にあたり、リロアサッシュとサッシュ6921は全く違う保存修復の方法が必要であった。これらの修復作業は展示に先行し、2009年の1月頃からビショップ博物館内の文化財部 (Cultural Resource) の修復ラボで保存修復家リンダ・ヒー (Linda Hee) とその助手達により始められた⁹⁾。

まずリロアサッシュの方は、ところどころの羽根が抜け落ちていた場所があったものの、修復の必要はないという判断がくだされたため、ヒーによって



写真5 修復前のサッシュ2本 筆者撮影

羽根のクリーニングをするのみに留まった。ただ、羽根がすり切れて減っている所をみると、実際に装着された過去があったことが想像される。

ところが、サッシュ6921の方は保存修復をしなければ展示できない状態であり、その作業に長時間を要した。修復作業といっても、修理するわけではなく、展示によりこれ以上の破損を招かない保存のための修繕作業が修復チーム計4名で行われた。損傷の激しい部分が、かつて白い木綿糸によって修理された跡があったが、それを取り除くためにはさらなる損傷を伴うため、そのまま残された。まず、織り地のオロナに近い色の絹 (クレイプリン) を全体に裏打ちし、補強する目的で、約2.5cm幅ずつサッシュの長さに沿って手縫いで細かく糸を付けていくことになった。

この修繕作業が終わる間、サッシュ6921は最小限の動きしか許されなかった。というのも、1cmでも動かすとその動かした跡にポロポロと落ちた繊維が見え、心が痛んだ。よって、このサッシュをテーブルに置く前に、まず実測にもとづいて裁断されたクレイプリンが置かれ、その上にサッシュが置かれ、そこへ私達が体をかがめて近づき、カーブニードルという半月型の針で少しずつ裏打ちを縫い付けて行く方法がとられた。使用された糸はポリエステルで、ほぼ同じ色でしつらえてあり、表から見ても縫い目はあまりわからないよう裏地に長く糸を横ばいにするものであった (写真6)。

長年の間、乾いてもろくなっているオロナ繊維を針で傷つけないために、糸を通す「目」は、織り目と織り目の間の比較的大きな隙間が空いている場所を選んで裏地の上に針を出し、また同様に「目」を選ん

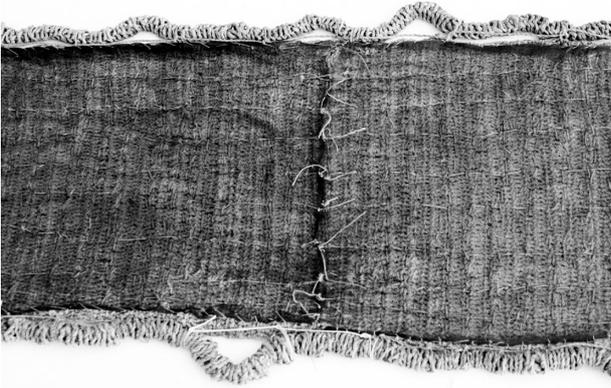


写真6 サッシュ6972裏 修復後 リアン・イケモト撮影

で針を表側に通す作業を貫いた。表から針を出し間違えて織り目の中間に糸を通そうとすると、針がオロナ繊維を壊してしまい、織り目のひとつがポロリと落ちた。サッシュを上下にもほぼ動かさずに「目」を読めるようになるまでやや時間が必要だった。

ビショップ博物館の保存修復記録にはこの裏打ち作業を中心とした修復に要した時間は4名で計129.25時間とあり、筆者の個人ノートには2008年1月29日～3月24日までの期間携わっていたという記録がある。これほど長い期間が必要だったのは、集中力を維持するために1日に2～3時間の限定作業として行ったため日数を要したということである。

(2) マウントする

最初から展示デザイナーはこれらのサッシュを斜めに見せるつもりだったのであろうか。リロアサッシュとサッシュ6921には平行だが角度が違う展示台がそれぞれ用意されていた。サッシュ6921が上段で角度が45度に近く、リロアサッシュの方は約30度弱ほどだ。ハワイアンホール改装プロジェクトで指揮をとっていたビショップ博物館副館長ベティ・カム (Betty Kam) とマウントメーカーという指示具制作者達が設計し外注に出したこの台はステンレス製で、2枚のアルミがサッシュを載せるように設計されており、当初はその板の上に黒い布を貼った厚紙を置き、サッシュを縫い付けて展示するという計画だった。それには修復チームがキャビネット型の展示ケースの中に入り、サッシュを縫い付けるという作業が予定されていた。

その2009年8月2日は、私にとって忘れられない日になった。サッシュの展示ケースに展示資料を全て入れた場合の狭さを考えるとせいぜい2人しか入れないという理由で、チームの中で一番小柄だった私が修復家ヒーのアシスタントとして設営に関わる

事になった。そこで3月25日の修復終了以来、収蔵庫で眠っていたサッシュを箱ごと運んだのだが、資料管理のマネージャーと共に、一番体格の良い警備員が収蔵庫のある建物から展示場への入り口までの約15m、サッシュにぴったりと寄り添っていた。展示場の中では、展示台上に載せる板がケースの横に用意されていた。ところが、展示板の角度を確認しサッシュがずり落ちないと確信したヒーが急きょ機転を効かせ、ピンでサッシュを展示板に留めてからケースの中に搬入することを提案した。理由は4日後に開館を控えていた状況ではその方が時間的にも効率的で、しかも美しく見えるからであった。

そして同博物館の昆虫類研究部に頭が黒く塗られた虫ピンをもらいに行き、いよいよ上段に展示するサッシュ6921から設営に取りかかった。まず、布を貼った板の上に、丸めたサッシュを少しずつ横たえながら広げ、数カ所を大きく間隔を取ってピンを留めた後、約5cmの間隔ごとにピンで両端から2人で留めていった。修復の時のようにオロナ繊維の隙間の穴をみつけてピンを刺していったのだが、この時裏打ちしてあったクレイプリンが本当に頼もしく、展示に耐えるための強度を作り出していると確認した。サッシュ6921の方は羽根がない状態なのでオロナの編み目の隙間を見つけるのに問題はなかった。

ところがリロアサッシュの場合、この方法は決して容易ではなかった。残念ながら手元に重さのデータはないが、箱から取り出したリロアサッシュはかなり重く、それを2人でゆっくりとサッシュに負担をかけないように持ち上げ展示台へ横たえた後、約2.5cmずつピンを刺していく事にした。作業を始める時に、ヒーがピン打ち作業は注意してサッシュ上下の端にあるオロナ地の隙間に打ち、決してオロナ繊維に打たないように指示したのだが、予想に反してその隙間を手探りで見つける事が至難の業だった。リロアサッシュは他の羽根衣裳と違い、羽根が圧縮されて埋め込まれるように作られており、黄色の羽根の縁どり部分ではオロナの下地が見えない。極度の緊張状態の中で作業が続いた。ふと気がつくと、ヒーは右端の反対側から始めたのにも関わらず、私が約50cm分をピンで留める間、残りの約300cm部分をピンで打ち終わってしまっていた。あらためて30年以上も修復に携わっている方の職人的な技術を垣間見た気がする。

あの時に集中して見つめ続けた赤と黄色の羽根の色は、その夜しばらく私の眼の前から消えなかった。そしてこの4日後、2本のサッシュは公開された。

3 ハワイ文化の展示

(1) ハワイアンホール

このようにビショップ博物館が展示準備に労力を費やしたこれらのサッシュは、ハワイの遺物を中心に集めたハワイアンホール3階の「神話の世界が人間の形を伴って具現化したとされる時代」を表現する場所に展示されている。それは「Wao Lani スピリットの領域と神の子孫アリイ (ali'i)」という名の空間であり、これらのコンセプトはハワイ文化継承者などをアドバイザーに迎えて、ハワイ原住民の世界観を反映して造られた(秋山 2010 p.38)。つまり、「アリイ」とはハワイの首長を指し、その首長達は神の直系だと信じられていた世界観を反映した展示構成になっている¹⁰⁾。

(2) 展示テキスト

リロアサッシュのキャプションとテキストにはハワイ的世界観を重視した傾向がみられると同時に現在の最新の情報も観覧者に提供している¹¹⁾。まず、前掲の放射線炭素年代測定法での結果が1400年代と記され、このサッシュを構成する材料名についても、その鳥の全身イラストと共に、イイヴイの赤い羽根が皮ごと使われていたこと、黄色の羽根がオオとマモの羽根であること、端についているのが人間の歯とヒウ (hiu) という魚の歯だということが明記されている。これらの動物名にハワイ語が学術名よりも先に用いられているのはもちろんのこと、続く展示

テキストにも同様の配慮がある。

例えば、まずハワイ語で“Na Ka’ei Kapu”そして続く英語で“Sacred Sashes (聖なるサッシュ)”と記述は常にハワイ語が先になっている(写真7)。ハワイ原住民の世界観を反映するコンセプトは展示テキストにも見られる。

以下にテキストの拙訳を引用する。

これらのサッシュは首長のもつ土地と人々を統治する特有の権利と、統治している首長から次の者へ引き継がれた権利を象徴する。極めて珍しく、世界にこの2つのサッシュのみが存在する。

ハワイ固有種ハニークリーパーと呼ばれる羽根でまばゆく(装飾された)サッシュは1400年代に実在したといわれるハワイ島の伝説上の首長リロアの物だったといわれる。これは、リロア王の子孫であるカメハメハ大王が掌握するまで、何世代もの首長達に相続されてきた。もうひとつのサッシュは、もはや羽根はないが、両端に付けられた人間の歯と魚の歯によって与えられたマナを保有する¹²⁾(括弧内筆者の補足による)。

はたして、最後の一文はそのままで意味を成すだろうか。ちなみに原文を参照してみると、“the other



写真7 展示ケース全容 筆者撮影

kaei, through no longer with feathers, retains that mana given it by the human molars and fish teeth attached to its ends” とある。

これは一般の英語圏の人間がハワイの文化の知識がなく読んだ場合には意味を成さないのではないだろうか。“Kaei”はキャプションで“sash”（サッシュ）と訳されているからよいものの、“mana”（マナ）とはハワイ語でスピリットや魂あるいはそれらから授かる力のことであり、それが奥歯や魚の歯によってサッシュに与えられたとは文化的なコンテキストがなければ理解できない解説である。

例えば、ハワイでは人間の髪の毛・歯・爪などにマナが宿ると信じられており、ビショップ博物館ではそれらを展示する上で重要視してきた（秋山 2010）。つまりこの解説は、英語という媒体を使ってハワイ原住民文化の視点からこの遺物のもつ文化的なコンテキストの理解を来館者側に求めながら、その意味を想像させる意図も含んだ展示テキストだといえよう。

(2) ハワイ王国と伝説の再現

このようにハワイ原住民の世界観から展示を構成するためか、このケースには2本のサッシュのほか、リロアの所有物だったと伝わる資料も展示されている。それらは、マロ (malo) と呼ばれる腰衣とクジラの牙でできたペンダントでパラオア (palaoa) と呼ばれるものだが、両方ともリロアにまつわるエピソードが紹介されており、リロアがウミの母アカヒアクレアナ (Akahiakuleana) に残したモノだというのだ。例えば、パラオアは首長達が髪の毛でできたレイ (lei) に付けていたステータスを表すモノであるが、さらにこれを説明するキャプションでは、神話において彼女の社会的地位は平民とされる間違が多いもののおそらく彼女も首長の出身であろうとの見解が述べられている¹³⁾。そしてリロア王の子ウミから300年後にカメハメハ1世が誕生したことを付け加えている。このケースの中では、ハワイ王国の一系の正統性が唱われているような印象を受けるが、それは、創造神話からの系譜伝承をもっていう各島の首長の存在（後藤 1994 p.30）を展示で再現しようとしているかのようだ。

ハワイ王国は1894年に滅んでいるが、展示の中では今でもその王家の継承は生きているかのような印象を受ける。時を超えた君主制の象徴として、サッシュは静かにその歴史を語っていた。

4 考察

リロアサッシュとは長らくハワイ王家とビショップ博物館により保存されてきた1400年代製作のハワイの古い羽根工芸の技法を駆使した君主にだけ所有が許された衣装である。その形はタヒチにも起源があり、さらに、もう一本のサッシュ6972の存在から、以前に羽根飾りのサッシュを作る文化がハワイにはあったと考えられる。特にサッシュ6972はローズが示したタヒチの抽象的なシンボルがあるサッシュの存在を考えると、模様があったという事実からして古いものかもしれない。この2本のサッシュの存在は、これらに付随する儀式や用法についてはわからないものの、何らかの形で使われるために伝統的技法をもって作られたということを示すのではないかな。

これはハワイの古代王族のステータスとそれにまつわる君主制社会が重要とされていた証拠となる資料のひとつである。この度、この貴重な資料があらためてハワイ原住民の世界観を尊重する語り口（ナラティブ）で初めて公開されたという事実は、ポリネシア地域研究に対しても博物館が示唆を与えることのできるひとつの事例を示している。残念なことに、文中で多用したローズの1978年の出版以降、リロアサッシュについて綿密なアプローチをした研究は後をみない。しかし、だからこそ博物館が年代調査を依頼し、展示できる状態に修繕して多くの人々に見せることに意味があるのではないだろうか。

おわりに

この度、リロアサッシュの保存修復と展示に関わったことで、ハワイの深い歴史と文化を垣間見ることになり、同時にビショップ博物館側のこの展示に賭ける姿勢をも目撃した。一方、装飾用の羽根を目的とする鳥の乱獲をし、人間の奥歯や魚の歯を装飾に使うなど、特有な価値観がある文化だとしても、その羽根を王のために集めた労力とその工程、歯や骨に宿る魂を信仰した文化の源流には力強いモノを感じる。そしてその失ってしまった文化の特質を、あたかも今日に蘇えらせるような空間を展示のなかに作ったビショップ博物館の脱コロナリズムの意図も感じた。

ただ、ビショップ博物館の保存修復プロジェクトに関わっている間はその羽根のコレクションの多さにいささか圧倒されたこともあった。しかし、絶滅種を生み出すまでに集められた幾多の鳥の羽根達が、なぜ王族に集まり、今日ビショップ博物館に保管さ

れているのか理解しなければならぬと考え始めた。つまり、現在の私達の価値観において過去の別の文化の美の基準を判断することは避けなければならない、それを残そうとしたリリウオカラニを含む人々が存在したからこそこのコレクションは現存する。

最後に、このような文化の象徴を他の文化的価値観に媚びず、むしろ誇る形で展示を実現したビショップ博物館をひとつのケーススタディとして考えると、これは失われた文化の価値観を再現する展示の可能性と考える。これも博物館が出来る文化のマネジメントの一例ではないだろうか。

[謝辞]

この稿を書くにあたり、ビショップ博物館の多くの方々にお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。

[註]

- 1) 2011年6月3日に行ったビショップ博物館への聞き取り調査では、1～2ヶ月以内に展示から取り下げられる予定という。
- 2) ワシントン・プレイスはリリウオカラニの夫ジョン・オーウェン・ドミニス (John Owen Dominis) の両親が残したホノルル市内に現存する復刻ギリシャ風建築物で、女王はここに1862年からイオラニ宮殿に幽閉されるまでの1893年の間と解放後の1898年から1917年に没するまで暮らした (猿谷 2002)。
- 3) ローズによると1878から1879年にかけてロバート・H・ベイカー (Robert H. Baker) というモデルがサッシュを着用してカメハメハ1世 (大王) の像の制作のために写真撮影した記録があり、その写真が像の元になった。
- 4) 文中の鳥3種はハニークリーパーと呼ばれる花の蜜を主食とするハワイに適応した固有種であるため、鳥の名前は和名ではなくハワイ語をカタカナ読みした名前を使用させていただく。ただし和名は以下括弧内に示す。
イイヴィ (アトリ科ハワイベニミツスイ)、オオまたはハワイオオ (キミミツスイ科ムネフサミツスイ)、マモ (アトリ科キゴシクロハワイミツスイ)。また、ビショップ博物館解説員グレン・コバヤシ (Glenn Kobayashi) によるとマモの羽根は濃い黄色でオオの羽根はレモンイエローということである。また絶滅の原因は乱獲だけでなく1820年代からのマラリアの伝染にもよるといふ (2011年2月24日聞き取り調査)。
- 5) 写真7の展示ケース内に標示されている。
- 6) 2007年3月23日にビショップ博物館へ送られたEメールより。
- 7) 2007年6月28日にビショップ博物館へ送られたEメールより。
- 8) 2011年6月2日のビショップ博物館副館長ベティ・カムへの聞き取り調査による。
- 9) 筆者は他の2人のアシスタントと1人ボランティアとともに保存修復助手 (conservation assistant) として2008年9月から2009年8月までハワイアンホール改装プロジェクトに参加した。
- 10) ali'iにも大首長 (王) と地方首長が存在した (後藤 1994 p.30)
- 11) この稿では観覧者に対して口答で行う展示解説と区別するため解説文をテキストと呼ぶ。
- 12) ビショップ博物館ハワイアンホール展示テキスト2009より。
- 13) 同上展示テキストより原文: "Legend often misstates that she was of commoner status, when she was probably of ali'i descent." この神話に対する現代の博物館の見解を示している。

[参考文献]

欧文

- Holt, J. O (1985) *The art of featherworks in old Hawai'i*, Topgallant Publishing Co., Ltd., Honolulu.
- Rose, G. R (1978) Symbols of sovereignty: Feather girdles of Tahiti and Hawaii, *Pacific Anthropological Records*, no. 28, Department of Anthropology Bernice Pauahi Bishop Museum Press, Honolulu.
- Hiroa T. R (Buck, P. H) (2003) [Originally published in 1957], *Arts and crafts of Hawaii*, Bernice Pauahi Bishop Museum Press, Honolulu.

和文

- 秋山かおり (2010) 「ビショップ博物館の新しい夜明け—ハワイアンホール改装プロジェクトの必要性—」『博物館学雑誌』第35巻2号, 全日本博物館学会, 35～48頁
- 後藤明 (2002) 『南島の神話』中央公論新社
(1994) 「ハワイ諸島の国家形成と人口論的基盤」『国立民族学博物館研究報告』19巻1号, 国立民族学博物館, 19～60頁
- 猿谷要 (2001) 『ハワイ王朝最後の女王』文藝春秋

地域の博物館との連携で育成する ミュージアム・リテラシー

～中学校における課外での 地名調査を通して～

富山大学人間発達科学部附属中学校

堀内 和直

1. はじめに

本稿は、学校教育においてミュージアム・リテラシーを育成するにはどうすればよいかを、地域の博物館と連携し、中学校における課外での地名調査を通して明らかにすることを目的とする。

学校教育におけるミュージアム・リテラシーとは、「博物館を使いこなす力」である。また、そのような力が必要なのは、子ども達が、博物館にあるモノや情報とどのようにかかわればいいのか、そのきっかけや方法を得ていないからである¹⁾。

これまでも学校教育におけるミュージアム・リテラシー育成の研究は、博物館の活用が学習指導要領²⁾でも示されている歴史系、科学系、美術系、総合的な学習において実践されてきた。成果としては、学校での活動において、博物館への好感度や博物館活用の目的意識が高まったことが挙げられる^{3) 4)}。また、博物館での活動において、少人数ではあるが博物館の展示や機能・特徴についての理解を深め自主的に利用しようとする意識が芽生えたと考えられることが挙げられる⁵⁾。しかし課題としては、学年単位のような大人数の生徒では、移動時間や時間数といった時間的制約、移動にかかる距離的制約、移動経費の財政的な制約があるので、生徒が博物館へ来館するきっかけがなかなか持てないことが挙げられる⁶⁾。また、博物館へ来館しても、学芸員とのやりとりが十分に行えず、モノや情報にかかわる方法を十分に身に付けられないことが挙げられる。

日本ミュージアム・マネジメント学会では、「ミュージアムリテラシーの涵養活動の推進について」と題した第14回の大会決議において、「ミュージアム・リテラシーを「社会におけるそれぞれの博物館の使命を理解し、その機能を活用しその学習や体験に基づく成果を更に社会に還元する能力」と考え、その向上に向けて今後国民運動として展開することを提案する」と言っている⁷⁾。学校教育において、ミュージアム・リテラシーの向上を国民運動として展開していくことを考えた場合、より多くの生徒に博物館にあるモノや情報にかかわるきっかけや方法を

獲得させるしくみを整えることが重要になってくるであろう。

本稿では、生徒に博物館にあるモノや情報にかかわるきっかけや方法を獲得させるしくみの1つとして、発展学習における休業中を利用した課外での調査を提案したい⁸⁾。これは、博物館での調査を正規授業の発展学習として休業中の生徒への課題とすることで、学校としては移動時間や時間数といった時間的制約、移動にかかる距離的制約、移動経費の財政的な制約がないので、多くの生徒に博物館へ足を運ばせるきっかけをつくることできるという利点がある。また、博物館側としては授業中に比べ来館する生徒が分散するので、一人一人の生徒の質問に学芸員がより丁寧に答えることができ、生徒に博物館にあるモノや情報にかかわる方法を身に付けさせることができるという利点がある⁹⁾。

そこで、実践例として、富山市郷土博物館と連携し、富山大学人間発達科学部附属中学校（以下「本校」）第2学年における課外での地名調査を紹介したい。そして、成果と課題についてまとめた。

2. 富山市郷土博物館と連携した中学校における課外での地名調査の実践

(1) 富山市郷土博物館について

富山市郷土博物館は、富山市の中心部、富山城址公園内に位置し、JR富山駅から徒歩10分と大変交通の便がよい。館内の展示は、中世の富山城の築城から明治時代以降の城址の変遷に至るまで400年にわたる歴史を紹介している。本校からは直線距離で3kmほど離れており、授業時間中での利用は難しいが、課外であればバスなどの交通機関を使って利用することは可能である。

(2) 富山城周辺の地名

富山城周辺には、本丸、丸の内、大手町、^{そうがわ}総曲輪、桜木町、桜町といった富山城に関係する地名がある。富山市郷土博物館の学芸員によれば、地名の由来は以下のとおりである。本丸は現在の富山城址公園の敷地内にある地名で、博物館の所在地であり、富山城の本丸があったことから付けられた。丸の内は三の丸があったところで、丸（敷地）の内側に位置していたことから付けられた。大手町は、城の正門である大手門があったことから付けられた。総曲輪は^{そとぐるわ}外郭ともいい、外の囲いの内側にあることから付けられた。桜木町は、富山藩第10代藩主前田利保の隠居所である千歳御殿に豪華な桜並木の庭園があった

ことから付けられた。桜町は千歳御殿からかつて流れていた神通川をはさんで北側に位置し、城からの景色をよくするために桜が植えられたことから付けられた。

(3) 社会科における地名

社会科の授業における地名の教材的価値について、谷川氏は以下のように述べている¹⁰⁾。1つ目は地名の属性から見て、誰もが毎日使っており日常性があること、具体性があり事象をイメージしやすいこと、有意味性があること、どこにでもあり普遍性があること、である。2つ目は、子どもにとって、意外性があること、親近性があること、ゲーム性があること、応用可能性があること、である。

だから、学校の授業で別の地名を取り上げ、その発展として地域の博物館での地名調査を行うようにすれば、生徒にとっては博物館で、日常的に使っている地名にどんな意味があるかをゲーム感覚でイメージし、意外な発見をして親近感が湧くとともに、さらに他の地域はどうなっているのかといった応用をしていくことができる。このように、地名を取り上げることで、学校での社会科の授業だけでなく、博物館での学びもより充実してくると言える。

(4) 博物館での学芸員と教師との打ち合わせ①

2010年5月下旬に富山市郷土博物館で、学芸員と教師による1回目の打ち合わせを行った。ここでは、まず、本校第2学年の夏季休業中の課題として富山城周辺の地名調査を富山市郷土博物館で行うことを確認した。

(5) 本校での地名についての授業実践

6月から7月にかけて、第2学年の4クラスの社会科の授業で、「東京湾岸にお台場という地名があるのはなぜか」という課題の実践を行った。授業時間は1単位時間の50分である。生徒は、これまでに学習したペリー来航の知識や当時の東京湾岸の砲台(台場)設置の様子をまとめた資料をもとに、黒船から江戸を守るためにつくられた台場が地名の由来であることを理解した¹¹⁾。そして、地名がその土地の歴史を知る手掛かりであり、その土地で起こった歴史的な出来事や人々の営みが地名には刻まれていることを確認した¹²⁾。

(6) 博物館での学芸員と教師との打ち合わせ②

7月上旬に富山市郷土博物館で、学芸員と教師に

よる2回目の打ち合わせを行った。ここでは、本校での上記(5)の授業実践の概要を教師から説明し、学校での事前指導の内容、調査する地名、解説用紙の内容、減免手続きの確認を行った。

特に、解説用紙については、城の基礎知識や富山城の歴史についての解説が博物館内には十分ないので、学芸員の助言をもとに、教師の方で作成した¹³⁾。ただ、事前に学校で配布するのではなく、博物館の受付で配布するようにした。博物館での生徒自身による学びを重視するためである。

解説用紙については資料1に示す。

資料1 解説用紙

富山大学人間発達科学部附属中学校第2学年のみなさんへ

解説
～富山城周辺の地名の由来を考察する手がかり～
富山市郷土博物館

1 城のつくりかた

城を構成する区画を曲輪や郭といい、どちらも「くるわ」と読む。城の中心の曲輪を本丸、それに続く曲輪を二の丸(二之丸・二ノ丸・二丸とも書いた)、そして三の丸、となる。西にあれば西の丸、ほかの曲輪から突出していれば出丸(出丸)という。

江戸軍学によれば、曲輪は丸く造るべきで、円形は高欄が広いかわりに外周が短いので、守備に有利であるからという。また、円形だから曲輪といい、何々丸と名付けるのだそうだ。

中世城郭の曲輪の外形は、丸いものや不規則な曲輪状のものが多く、近世城郭の曲輪の外形は、四角形を基本とし、さらにそれを複雑に折り曲げたもので、まったく丸くない。

曲輪の入口を虎口といい、通常は虎口には、城門を造る。本丸の虎口は、表口の大手と、裏口の小手の、少なくとも二つを開く。一つだけでは、いざという時に脱出できなくなるし、通用口としての裏口も、城内での生活に必要であったからだ。

三浦正幸『城のつくり方図典』小学館 2008年、『広辞苑』岩波書店 2006年 より

2 総曲輪

総曲輪は「そうぐるわ」ともい、外郭(「そとぐるわ」ともいう=外側のかこい)に囲まれた城門内の全体のことを指す。「そうがまえ」ともいう。

『広辞苑』岩波書店 2006年 より

3 千歳御殿

千歳御殿は、1849年、富山藩主前田利侯が御隠居の後、江戸から富山に帰られ、本丸に連続する東の出丸の東側に移り住んだ隠居所であった。学芸に没れた利侯の趣味が大いに込められ、富山城内に建てられた建物の中でも最も豪華で個性的といえる。建の東側一帯には、庭園が設けられていた。また、北を望めば、神通川(今とは流れが異なる)を隔てて牛島村辺りが見え、川向の遠方には、数百年(一間は182m)にわたって軍木が植えられており、幸などは味わいのある風景になっていた。

『再現 千歳御殿』富山市郷土博物館 2007年
『富山城ものがたり』富山市郷土博物館 2010年 より

(7) 本校での地名調査についての事前指導

上記(6)の打ち合わせの後、7月中旬に本校第2学年の4クラスで地名調査についての事前指導を行った。事前指導に使った用紙を資料2に示す。

事前指導の内容は、調査内容、調査日時、博物館に着いてからの流れ、館内での調査方法やマナーの確認である。

調査内容は、富山城周辺の本丸、丸の内、大手町、総曲輪、桜木町、桜町の6つの地名の由来である。

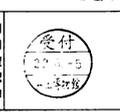
調査日時は、本校の夏季休業期間中である7月24日(土)から8月24日(火)の9:00~17:00である。博物館に着いてからの流れは、

資料2 事前指導に使った用紙

富山市郷土博物館 御中 2 階 2 2

富山城周辺の名所の由来に関する調査のため、貴博物館を利用させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

利用
確認
印



(1階受付でもらうこと)

富山大学人間発達科学部附属中学校

第2学年

富山市郷土博物館での調査についての注意点

- 1 調査日は7月24日(土)～8月24日(火)9:00～17:00。(入館料は無料)
- 2 博物館に着いたら、1階受付で学校名と名前、目的を言って、この用紙に確認印をもらい、2階へ行く。
- 3 次に2階受付で、学校名と名前、目的を言って確認印を見せ、解説の用紙を受け取り、展示室内に入る。
- 4 調査を終えたら、2階受付、1階受付でお礼を言って、館を出る。
- 5 筆記用具と歴史ファイルを持って、レポート作成に必要なことをメモ用紙に記入する。
- 6 電子辞書や辞書類を持ち込んでもよい。
- 7 自分で調査して分からないことがあれば、学芸員の方に質問する。

2階の窓口の受付で学校名と名前を名乗って「展示について質問があるのですが」という。失礼な態度にならないよう十分注意し、終わったら丁寧に挨拶を言う。

- 8 筆記用具は鉛筆あるいはシャープペンとする。消せないインク系はダメ。
- 9 服装は自由だが、博物館に入るのにふさわしいようジャージのような軽装や派手にならないようにする。
- 10 展示のガラス、パネル、床を下敷きがわりにしない。
- 11 デジカメなどの撮影はフラッシュを使わなければ可能。ただし、フラッシュの切り方がわからない場合は、遠慮なく学芸員の方に聞く。
- 12 館内では、騒ぐ、無断で展示物に触る、走る、といったマナーに反することをしない。
- 13 友達と1箇所ずっと固まっているようなことをしない。

調査を終えての感想

富山市郷土博物館と同じように歴史が関係して
地名がつけられてきた場所がある。と気づいた。また、
電子辞書や辞書類を持ち込んで調べた。地名がつけられて
場所がわかるようになった。

- ① 1階受付で、学校名と名前、目的を言って確認印をもらい、2階へ行く。
- ② 2階受付で、学校名と名前、目的を言って確認印を見せ、解説の用紙を受け取り、展示室内に入る。
- ③ 調査を終えたら、2階受付、1階受付でお礼を言って、館を出る。

である。本人が博物館へ行ったことを証明できるよう、日付入りの確認印を押してもらった。さらに確認印をなくさないように、提出するレポート用紙の裏に確認印を押す箇所を設けた。

- 館内での調査方法やマナーについては、
- ① 筆記用具とファイルをもって、レポートに必要なことをメモ用紙に記入する。
 - ② 電子辞書や辞書類を持ち込んでもよい。
 - ③ 自分で調査して分からないことがあれば、学芸員の方に質問する。質問方法は、2階の窓口の受付で学校名と名前を名乗って「展示について質問があるのですが」と言う。失礼な態度にならないよう十分注意し、終わったら丁寧に挨拶を言う。
 - ④ 筆記用具は鉛筆あるいはシャープペンシルとする。消せないインク系は使わない。

- ⑤ 博物館に入るのにふさわしいようジャージのような軽装や派手にならないようにする。
- ⑥ 展示のガラス、パネル、床を下敷き代わりにしない。
- ⑦ デジカメはフラッシュを使わなければ使用可能だが、フラッシュの切り方が分からない場合は遠慮なく学芸員の方に聞く。
- ⑧ 館内で、騒ぐ、無断で展示物に触る、走る、といったことをしない。
- ⑨ 友達と1箇所にずっと固まっているようなことをしない。

である。特に、ミュージアム・リテラシーの育成にかかわる学芸員への質問については、具体的な動きや言葉を載せた。

(8) 富山市郷土博物館での地名調査

教師側は、中間ぐらいにあたる8月11日に富山市郷土博物館を訪問し、調査の様子を確認した。後は調査の開始日と終了日後に電話で様子を確認した。それによると、本校生徒の来館は多い日で1日17人であった。来館中、学芸員に質問する生徒もいたが、学芸員には、地名の由来そのものを質問されても答えを言うのではなく、ヒントを与えてもらうようにした。生徒たちは、解説用紙を参考にしながら展示物の見方を教えてもらった。マナー面については、館内で騒いでいた数人の生徒に1度注意した(すぐに静かになった)ことがあったが、大きな問題はなかったようである。

3. 実践結果

(1) アンケート調査

富山市郷土博物館での地名調査を行った本校第2学年に対して、10月中旬に23項目のアンケート調査を実施した¹⁴⁾。アンケート内容は、事前指導や以下のミュージアム・リテラシーに関係するもので、第2学年159名中有効回答者総数は153名である。アンケート結果については、資料3に示す。

資料3 アンケート結果

質問1) 富山市郷土博物館での調査は楽しかったか。

とても 楽しかった	やや 楽しかった	あまり 楽しなかった	まったく 楽しなかった	合 計
30人	91人	27人	5人	153人
19.6%	59.5%	17.6%	3.3%	100.0%

質問2) この調査をきっかけに、機会があればまた博物館へ行ってみたいか。(他の博物館でもよい)

とても行きたい	やや行きたい	あまり行きたくない	まったく行きたくない	合計
20人	83人	40人	10人	153人
13.1%	54.3%	26.1%	6.5%	100.0%

質問3) 自分で調査して分からないことを学芸員の方に質問できたか。

できた	誰かが質問していたのを聞いていた	できなかった	合計
58人	14人	81人	153人
37.9%	9.2%	52.9%	100.0%

質問4) 3で「できた」「誰かが質問していたのを聞いていた」¹⁵⁾と答えた人について、質問で今まで分からなかったことが分かったか。

とても分かった	やや分かった	あまり分からなかった	まったく分からなかった	合計
48人	20人	2人	2人	72人
66.6%	27.8%	2.8%	2.8%	100.0%

(2) アンケート調査の分析

博物館の調査が楽しかったと答えた生徒が8割近くを占め、機会があればまた博物館へ行ってみたいと答えた生徒も7割近くいる。休業中の学校からの課題とはいえ、概ね博物館での活動に好意的な印象をもち、今後の来館へのきっかけをつかんだと言える。

自分で調査して分からないことを学芸員の方に質問できたかについては、「できた」「誰かが質問していたのを聞いていた」を合わせるとおよそ5割となり、半数近くの生徒が学芸員にかかわったことになる。質問内容については、例えば、

- ・桜木町の地名の由来は何ですか。
- ・名前の由来を知る手がかりを教えてください。
- ・桜町や桜木町の昔の様子はどうだったのですか。
- ・丸の内の丸は江戸時代の城の丸が関係しているのですか。
- ・博物館のどのあたりを見れば、地名について分かるのですか。

といったようなものである。由来そのもの、由来を知る手がかり、昔の様子、丸のような解説用紙のこと、展示場所、についての質問があることが分かる。また、「できた」「誰かが質問していたのを聞いていた」生徒の内、9割以上の生徒が、今まで分からな

かったことが分かったと答えている。このことから、半数近くの生徒が学芸員とかかわり、調査について今まで分からなかったことが分かり、博物館にあるモノや情報とかかわる方法を獲得できたと言える。

4. 成果と課題

(1) 成果

成果としては、アンケート結果から2点が挙げられる。

1つ目は、多くの生徒が博物館での活動に好意的な印象をもつとともに、今後の来館のきっかけをつかむことができたということである。各地域の博物館ごとに調査内容や解説用紙を開発し、周辺の学校と連携して実践を積み重ねていけば、多くの生徒のミュージアム・リテラシー育成につながるものと期待できる。

2つ目は、半数近くの生徒が学芸員とのかかわりを通して調査について今まで分からなかったことが分かり、博物館にあるモノや情報とかかわる方法を獲得できたということである。これは、学年や学級の生徒が一斉に行くような授業中での活動の場合、限られた人数の学芸員では対応に無理があるので、できないことである。このように、多くの生徒が学芸員とかかわったことで博物館にあるモノや情報とかかわる方法を獲得でき、ミュージアム・リテラシーの育成につながったと言える。

(2) 課題

課題としては、以下の2点が挙げられる。

1つ目は、成果の2つ目に挙げた学芸員の対応の限界である。富山市郷土博物館には3人の学芸員がいるが、他の来館者への対応もあり1日20人ぐらいが限度であるということであった。今回、本校生徒の来館は多くて1日17人だったので十分に対応できた。しかし成果の1つ目に挙げたように、このような取り組みが他校にも広がっていくと、同じ博物館を複数の学校が調査対象に利用する場合も考えられ、互いの学校が調整して調査時期をずらして行うことや、ボランティアの学芸員を確保するといった対策が必要になってくるだろう¹⁶⁾。

2つ目は、博物館での生徒の自由な学びをいかに保障していくかである¹⁷⁾。今回は、教師から出した課題について調査するものであった。これは、調査中に質問してきた生徒に学芸員が適切にヒントを与えられるよう、訪問する博物館を限定し事前に打ち合わせを行った上での課題を出したかったからであ

る。今後は、学芸員との連携を大切にしつつ、生徒が自ら課題を見つけ調査していくような活動もできるようにしていきたい。

【注】

- 1) 佐藤優香「ミュージアム・リテラシーを育む—学校教育におけるあらたな博物館利用をめざして—」『博物館研究』Vol. 38 No. 2, 2003, pp. 12—15.
- 2) 「中学校学習指導要領」文部科学省, 2008
- 3) 奥本素子, 山田政寛, 加藤浩「博学連携活動における事前学習教材の開発と利用—博物館認知オリエンテーション教材を利用した事前学習—」『博物館学雑誌』第35巻 第1号, 2009, pp. 97—115.
- 4) 伊藤博「博物館学習における体験を学びに発展させる事前学習についての考察」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第9号, 2005, pp. 49—55.
- 5) 田邊玲奈, 岩崎誠司, 亀井修, 小川義和「異分野の博物館連携によるミュージアム・リテラシーの育成—国立科学博物館の上野の山ミュージアムクラブを事例に—」『日本科学教育学会 年会論文集』29, 2005, pp. 13—14.
- 6) 前掲書3) p. 101, 石川誠「学校と美術館の連携に関する考察Ⅰ—美術館教育普及担当者への調査から—」『美術教育学: 大学美術教科教育研究会報告』No. 22, 2001, pp. 13—28.
- 7) 日本ミュージアム・マネジメント学会「ミュージアムリテラシーの涵養活動の推進について(大会決議)」<http://www.jmma-net.jp/katudou/14taikai/14ketugi.html> (2010年10月11日閲覧)
- 8) 生徒のミュージアム・リテラシー育成における教師の役割については、福山文子「博物館活用に求められる「教師力」—「構成的な学び」の視点から—」日本社会科教育学会「社会科教育研究」No. 110, 2010, pp. 95—106. を参照した。
- 9) 小島氏によれば、歴史系博物館におけるミュージアム・リテラシーとは、「展示の場において、資料の理解に基づいて自ら歴史像を形成する能力」であり、観客は学芸員と同じ位置に歴史像をつくる主体として立つモデルでなければならない、という。とすれば、生徒が学芸員と同じ位置に歴史像をつくる主体として立つためには、自ら歴史像をつくるよう展示を解釈していくとともに、学芸員とのかかわりを深くしていくこ

とも重要であると言える。小島道裕「歴史系博物館におけるミュージアム・リテラシー」『日本ミュージアム・マネジメント学会会報』No. 53 (Vol. 14 No. 2), 2009, pp. 11—12

- 10) 谷川彰英「地名を生かす社会科の授業」黎明書房, 1986
- 11) 教材の開発にあたっては、以下の資料を参照した。
 - ・「新編 中学校社会科地図」帝国書院, 2005
 - ・「地図で訪ねる歴史の舞台—日本—」帝国書院, 2003
 - ・「コンサイス日本地名事典〈第5版〉」三省堂, 2007
- 12) 吉田金彦, 糸井通浩編「日本地名学を学ぶ人たちのために」世界思想社, 2004
- 13) 解説用紙の作成にあたっては、以下の資料を参照した。
 - ・三浦正幸「城のつくり方図典」小学館, 2008
 - ・「広辞苑」岩波書店, 2006
 - ・「再現 千歳御殿」富山市郷土博物館, 2007
 - ・「富山城ものがたり」富山市郷土博物館, 2010
- 14) なお、8月下旬に終わった地名調査のアンケートが10月中旬になったのは、本校では、夏季休業終了後すぐに、所属する学部生の教育実習が始まり、まとまった時間が取れないことや、教育実習終了から10月上旬まで、部活動の大会、期末考査、通知表渡しがあり、生徒が落ち着いて振り返られないと考えたからである。
- 15) 部活動単位などのグループで行く生徒が多いと考え、アンケートにはグループの「誰かが質問していたのを聞いていた」という項目を設けた。3 (1) のアンケート調査でも、8割以上の生徒がグループで、そのうち7割以上が主に部活動単位で行ったと答えている。
- 16) 薄井伯征「博物館ボランティアの養成・活動支援とミュージアム・リテラシー—秋田県大潟村における実践から—」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第14号, 2010, pp. 29—35
- 17) 小笠原喜康; チルドレンズ・ミュージアム研究会編著「博物館の学びをつくりだす」ぎょうせい, 2006

謝辞

本研究に企画段階からご協力いただきました富山市郷土博物館の皆様にご心から感謝いたします。

地域と美濃加茂市民ミュージアムの関係

～「ていねいな暮らしがあったころ」展をとおして～

美濃加茂市民ミュージアム

学芸専門監 可児 光生

学芸員 藤村 俊

1 はじめに

2000年（平成12）10月にオープンした美濃加茂市民ミュージアムは、①自然との共存 ②学校教育との連携 ③市民参画 ④地域づくりの4点を開館以来のねらいとして活動を進めている。

当館は、必ずしも博物館のモノの展示にこだわらず、市に関わる文化財や文化資源なども対象として活動をしている。理念④にあげられているように「地域の中での博物館」としての位置づけのもと、たとえば坪内逍遙（美濃加茂が生誕地）をはじめとする先人を活用した演劇や朗読などの催しが行われ、市民交流の場ともなっている。

館では年間に4回から6回ほど展覧会を行っているが、地域の素材を用いた展示をこれまでに数々開催してきた。

2001年4月に開催した「生活絵巻に見る高橋余一のまなざし展」では、市内の古井町の生業、風俗、遊び、祭礼などが描かれた明治から昭和にかけての19巻の絵巻（市指定文化財）を紹介した。会期中には地域住民の談義や聞き取りなどおこない、地域の時代の変遷を考える機会となった。

「まちの観察日記展」を2004年7月に開催した。民家の軒先、看板、人の生活風景など見落とされがちな、なにげない「まち」のおもしろいモノを拾い集め、写真や絵にして展示した。身近な地域も見方を変えればオドロキがいっぱいの展示となった。実際にまちを歩いてみる講座やワークショップ、フォーラムを実施した。

2006年7月には、環境の変化に対応しながら生きる野鳥の生活を考える「生きる、くらす 鳥とひと展」を開催した。会期前から市内小学校児童や住民に呼びかけ、ツバメの巣の調査を行い、会期中にその結果が更新されていく形となった。身近な生活と鳥との関係、地域の自然環境を考える契機となった¹⁾。

これらの展覧会は、地域住民により知ってもらいたいことからの紹介を行い、市民が参画する催し物

も部分的に行われた。そのことは、博物館から地域への一定の刺激や投げかけになったと思われる。しかしながら、それは表層的なものに留まり、博物館が地域の中に積極的に入っていったとはいえない。まちやそこに住む人々の「動き」を意識したり、館の活動とつなげていこうとするような視点は希薄であったと言えよう。

2 博物館と地域の3段階

当館では、地域博物館として、展示を中心とした館の活動と地域との関わりについて次の3段階があると考えられる。

- i) 博物館が地域の素材を調査研究し、展示や情報発信を行う。
- ii) 博物館が展示に関連した市民参画の催事などを行う。
- iii) 地域の動きと博物館が連動しつつ、そこでの課題とあり方を両者がともに考える。

博物館の機能と特性を活かした地域資料の調査研究展示活動をすること、このことは館からの一方的な働きかけであるが、それをきっかけにした関連事業などを繰り返していくことで、徐々に地域住民と意識を共有していくことが期待される。

地域には、そこにおける特長や良さ、住民の思いがある。博物館は、それをふまえた地域の「動き」について理解した上で、地域の持っている良さをいかしたことがらを館の視点で提案する。そのあとの地域とのやりとりを通して、新しい発見、価値が付加され、両者に蓄積されていく。そしてそこから新しい課題やテーマが見つかり、次の展示につながっていく。そのようなサイクルといえる。

上記の関わり方の3段階についてはその前提となるものがある。

それは、まず館の設置者でもある市として、地域と住民に対する方針が明確にされること、次に住民が地域資源を大事にし生かしていこうという認識を持ち、それがさらに博物館とも共有されることである。

2008年から、美濃加茂市は10年後のあるべき姿を提示する第五次総合計画（～2019年）の策定作業を始めた。市の直営である市民ミュージアムは、館の運営方針の一つに「地域再発見」というキーワードをあげた。見落とされがちな地域の資源をまず調査し、地域と連動しながら活用していくプログラムを毎年積極的に開発していくこととなった。それは地域文化に関する市全体の方針の一つとして定められた。

自治体は、地域の立場にたったビジョンや文化施策を組織として明確に示しておくことが大事である。博物館は市全体の方向性を理解し与えられた分野で住民とともに事業を進めていくこととなる。方向性が明確になれば、それがよりどころとなり、地域の人々と博物館の両者が関わる事業がより円滑に進んでいくと思われる。

一方、市は数年前から「美濃加茂市景観計画」の策定に向け準備に入っていた。今回の展示写真の舞台である伊深地区は図らずも景観計画重点区域に設定され、「豊かな自然環境や先人たちが残してくれた歴史的資源を活かした景観を保全し、その景観ポイントを巡る道づくりに取り組みます。」と方針が示された。それに伴い、自然豊かな地域の景観をあらためて見直す会合や現地調査などが地域の人々によっておこなわれた。

また、ほぼ同時期に市では地域住民によるまちづくりを目指して、この伊深地区を含めた市内の二地区に住民メンバーによる「まちづくり協議会」が組織されることになった。各分野において「地域のいいところや課題を見つけ、それに取り組み解決する過程で住民本位の主体的まちづくりをすすめていこう」とするものであった。

「景観計画」「まちづくり協議会」。地域に暮らす住民にとって、どちらも外的要因であったが、これをきっかけにして、地域のよさを自分たちのまちづくりに繋げていこうという共通した気持ちが住民に浸透し、自発的な動きが始まろうとしていた。

市民ミュージアムでは、このような状況を踏まえつつ、2009年12月「ていねいな暮らしのあったころ 佐野一彦の撮った伊深の里山」展を開催し、関連イベントを企画していくこととなったのである。

佐野一彦（1903-1997）は、昭和30年代から40年代にかけ民俗学者の眼からみた当時の身の回りの光景を約7,000枚の写真に残した。周りの自然やかかわる人を大切に、つつましくていねいに生きていた里の人々の記録である。ただ懐かしさだけではなく、そこには、いまの私たちの生活や社会に対するいろいろなメッセージが込められていると考えた。快適さと引き換えに失いつつある大事なものを思い、少し行き過ぎたふだんの暮らしを見つめなおす、今を生きる人々にとって、一つの小さなきっかけになればという趣旨であった。



写真1 「豆を干す」〔撮影・昭和38年10月22日〕



写真2 「子どもの水遊び」〔撮影・昭和39年7月31日〕

「ていねい」を一つのキーワードにして伊深地区の写真85点を選定し展示した。その多くは、今はない風景であり、人々の暮らしの様子を知るため、関係者から幾度となく聞き取りをした。展示写真には、できる限り解説をほどこし、必要な部分についてはさらに図解で補足をした。

生活スタイル、家族、地域社会の昔と今、課題を考えるきっかけを展示で示そうとした。今までになく地域を意識し、ともに考えていく催し物を行うこととなった。

3 「道草 —伊深の冬の里—」事業

前述した展覧会の関連催事の 하나가、「道草 —伊深の冬の里—」であった。それは展示資料となった佐野一彦の撮影した写真を参加者が手にしながら、当時の撮影地となった伊深の里を歩くという内容である。

館ではこれまで美濃加茂市という領域を中心に、ミュージアムの内外で開催する事業を実施してきた。屋外（敷地外）では例えば、古墳や中世城館などのような地域に残る遺跡・史跡を探訪するもの、近世～近代に制作された絵図などの資料を手にして現地

をめぐるもの、河川などの自然環境を探るもの、野鳥・野草・地層や化石などの観察会である。これらは対象とする分野は異っているが、おおむね、野外で体験的な活動を行ったり、学芸員や研究者といった専門的な講師から解説・指導されるような内容であった。体験学習プログラムを基本とした（講座的な）観察・見学会、採集会などと位置づけることができよう。

一方、ミュージアムにおける教育活動には、「ワークショップ」という手法があり、参加者自身の積極的な意識の開眼を促す活動として捉えられている²⁾。そこでは、ファシリテーターによって、参加者同士の交流が積極的に深められることで、学ぶ側にも伝える側にも、「体験・体感を通じた学び」が生まれてくるものであるとされている³⁾。

本事業では両者の方法を活かしながら、前述した博物館と地域の3段階のiii)の機会となるよう、進められることとなった。それは、「関わった市民（同士）」が、互いに「交流」しながら、「『まち』を歩いて」何かを発見する「コト」を目指した、ワークショップとでもいえるだろう。

このような事業を進めるにあたって、一つの力となったものが、博物館ボランティアであった。館には156名（2011年5月現在）のボランティアが在籍し、6つのグループに分かれて活動が行われている。そのうち「展示ガイド」は、常設展示室や一部の企画展の案内、また来館者が展示品に親しむことのできるようなイベントなどの企画運営を主な活動としている。これまで基本的には館内に迎え入れた方々への対応が主なものであり、館外の活動といえば、メンバーによる調査や関心を高める活動の一環として、市内や近隣市町村などへでかけることが中心であった。しかしながらこの数年、本論でふれるような事業に携わる活動が展開されている⁴⁾。

さて今回、「道草〜」事業の準備作業を展示ガイドらと進めるにあたり、事前に何度も現地を訪れたが、撮影以来、年数を経ても景色がそのまま残っているところ、多少の変化があるとはいえ、その当時の風景を十分に感じることもできるところもあり、普段はあたりまえに住んでいる「まち」の姿に対し、一同は興味深く新しい発見をすることができた⁵⁾。この事前の活動で得られたものは、当日の参加者とワークショップを進めていく上で、重要なアクティビティ（学習活動）ないしは手段として、期待に応えるべく「コト」になるであろうと展示ガイドが感じたこと、このことが重要である。

また事業の実施にあたっては、展示ガイドのみならず、ミュージアムの協働相手としての役割を担う地域の住民らの存在が大きい。前述した「景観計画」の策定や「まちづくり協議会」において、会合や現地調査などの取り組みを進め、地域の公民館講座でも「わが町、伊深には、さまざまな歴史をしのばせる跡や、先人の遺跡などがたくさんあります。各地に残るそれらの跡を歩いてめぐりながら、その歴史や足跡が今に伝えるものを確かめてみませんか？」という内容の「伊深めぐり」について、毎回テーマを変えながら、企画・実施していたメンバーである。館と普段からの交流もあってか、今回の事業の主旨を説明し、連携・協働を呼びかけたところ、快い承諾が得られた。

当日は、住民としての立場から、佐野の写真にみられる風景（町並みや人々）について、また「道草」した場所にまつわる記憶・体験などの話題提供があった。また現在、かろうじて伝わる保存食の「サキボシ大根」（佐野が撮影した当時、この季節の家々の軒先にあたりまえに吊るされていた）をワークショップ中に参加者へいただけしたこと、たまたま道すがら出会った人に佐野の写真を見せながら、その方の思い出話を引き出すこと等も行えた。このことは特に、その土地の住民が参画し、ワークショップの「触媒」や「進行促進」としての役割が果たされたからこそ、できたことだったと思われる。



写真3 参加者同士で写真と現在を見比べる

参加者の様子を伝えるものとして、催事後のアンケート結果の一部を紹介したい。自由記述欄に「佐野一彦さんが撮った写真の時期は、私の子供の頃と重なっています。それらの写真を手にしながら伊深を歩いていると、たとえ住んでいた所が違っても、自分の当時の様子を思い出すことができ、タイムスリッ

(3) 住民による動き — 展示

前述 (2) のメンバーの企画設営による展覧会。館の「ていねいな～展」が終了した後、会場で展示された写真の一部、これまでの調査研究活動の報告、メンバーによって収集されたその土地で使用されていた民具資料（鎌ほか）なども併せて紹介された。これは美濃加茂市民ミュージアムではなく、同市内の図書館のロビーで開催されたものであり、以後テーマを変えながら展示されている。活動の広がりを出すものであろう。



写真6 「伊深の百姓しごとと行事」展

(4) 市・住民による動き — 市民主体の景観まちづくり 前述の「美濃加茂市景観計画」によるところである。



写真7 景観マップの作成

その土地の住民らが中心となって、「伊深地区の景観を考えるワーキング」が立ち上げられ、現地調査を経て『伊深をめぐる路 語り継ぎたい暮らしの風景』と題したマップが作成された。ビューポイント、各所の説明なども記載されている。

5 おわりに

本稿では、特に「市民参画」「地域づくり」を理念にもつ館が、開館以来、展覧会活動を軸としながら進めてきた「地域」に向けた事業をふりかえることで、地域との関わりの過程などを考えてみた。

地域には現実的で即効的に解決しなければならないさまざまな課題がある。それに加え、地域資源に対する「共通認識」とされる中でも微妙なズレや温度差があるのは当然である。それは住民同士の間にもあるし、博物館と住民の間、博物館と他の行政組織との間にもある。

そのような状況で、「歴史的遺産とそれを残そうとする地道な仕事を大事にする」「催し物は一過性ではなく蓄積され、地域の財産となるようにする」「これからの暮らしや社会的課題を考えるヒントになることをする」といった、美濃加茂市民ミュージアムとしての博物館の視点や手法を見失うことなく、我慢づよく地域に関わっていくことが大切である。

その際の粘り強さとしなやかさこそが、社会的存在である地域博物館として、これから必要とされることであろう。

注記

- 1) これらの展示や活動については、美濃加茂市民ミュージアム『生活絵巻に見る高橋余一のまなざし』2001、同『「まちの観察日記」展図録』2004、可児光生「人から学ぶ、こころを伝える」『ミュゼNo.81』2007 など参照。
- 2) 大堀哲「博物館教育活動の内容と方法」『新版・博物館学講座 生涯学習と博物館活動』第10巻 雄山閣、1999、p. 33-35
- 3) 中野民夫『ワークショップ—新しい学びと創造の場』岩波書店、2001
- 4) 藤村俊「地域のミュージアムができること—地域再発見プログラム事業から—」『美濃加茂市民ミュージアム紀要』第9集、2010
- 5) 現在も洗い物をする人がいる「コウドバ」、辻や通りの様子、土蔵、「くずや」とよばれた茅葺き民家だったものを屋根がえされた家、軒先に吊られたダイコンなどをみることができる。

基礎部門研究会

平成22年度
第3回研究会
開催報告

テーマ：博物館と利用者の接点としてのミュージアム・リテラシー
～地域と協働する博物館を目指して～

日時：平成23年2月12日（土） 13：30～17：00

会場：東京国立博物館 平成館小講堂

参加人数：28名（発表者・関係者を含む）

報告者：亀井 修（国立科学博物館）

第3回の基礎部門研究会は、「博物館と利用者の接点としてのミュージアム・リテラシー ～地域と協働する博物館を目指して～」のテーマで、平成23年2月12日（土）13：30～17：00に東京国立博物館 平成館小講堂を会場に参加者28名を迎え行われた。以下にその概要を示す。

1. 開催の趣旨 小川 義和（国立科学博物館）



- ・21年度から「ミュージアム・リテラシー」のもとで、様々な活動を行ってきた。
- ・学校、教員、学芸員、地域……理解の観点を設定したが、ミュージアム・リテラシーはこれらの「のりしろ」となる概念である。

2. 提言：「科学館と市民の相互作用が生み出すよりよい地域社会～山梨での実践から～」

高橋真理子（山梨県立科学館）



人々がどう主体的に博物館を利用し得るのか、博物館としてどのような考えと取り組みをしているのか、博物館は市民から何を学んだのかが、具体的事例に沿って紹介された。

○博物館における主体的な学び

「博物館における主体的な学び」とは「博物館の自分化」である。一人ひとりの経験、記憶と、目の前にあるモノ、コト、などが結びついてはじめて人は「学ぶ」こととなり、人々の多様な学びに、共通するものがあるとしたら、それは「よりよく生きたい」という願いだろう。

○山梨県立科学館での事例

①プラネタリウムを場にした市民活動「星の語り部」、②地域全体を場にした「ライトダウン甲府パレード」、③全国の人たちとつながった「星つむぎの歌」、④医療・福祉現場とのつながりなど。これらは、「よりよく生きたい」と願う人々に、ミュージアム活動を沁みこませていくような活動といえる。今回は、①「星の語り部」の活動を軸に報告された。

○「星の語り部」の活動

科学館が企画した「プラネタリウム・ワークショップ」から生まれた、「表現・創造・交流」をキーワードとしたグループ。障がい者もメンバーとして活躍しており、さまざまなバリアを超えて活動中。プラネタリウム作品制作、ユニバーサルデザイン絵本や「ほしのうた」制作、病院やカフェでの出張プラネタリウム、駅前観望会、子育て支援団体とのコラボレ、など、科学館の中だけでなく、外にでかけていって、星から遠い人たちに星や笑顔を届ける活動も多々ある。これらに触れた人々の感想から・・・「制作したみなさんの熱意がとても感じられる作品」、（全盲の中学生が絵本にふれて）「星は難しいと思っていたけど、今日は星が見られてすごく嬉しい」、「市民と科学はつながるんですね」など。

○科学館が「星の語り部」から学んだこと

- ・専門家ではない市民の発想が多くの科学館企画（「星つむぎの歌」など）をうみだした。
- ・ユニバーサルデザインの発想は、当事者がともに活動しているからこそ。
- ・アウトリーチ活動は職員だけでは限界があり、市民活動が支えている。

科学館と「星の語り部」の相互作用が、スパイラ

ル状態になって、地域社会を巻き込みながら「よりよく生きる」という方向に向かって進んでいる。

3. コミュニティミュージアムは如何にして実現可能か：市民活動団体の育ちを見守る助成プログラムの試み 菅井 薫（お茶の水女子大学）



報告では、i) 先進的な事例／先行事例が、属人的に語られる／説明されるのはなぜか、ii) 市民活動団体と行うプロジェクトが、「ミュージアム活動」として認められにくいのではないかと、という問題関心が最初に示された。その上で、市民活動団体とミュージアムが共に行うプロジェクトを、「ミュージアム活動」の一環としていくために何が必要なのか考えることが報告の目的とされた。

具体的には、「花王・コミュニティミュージアム・プログラム」（以下、助成プログラムと略す）の概要及び課題を対象事例として、上記の目的を明らかにすることを試みた。当該事例は、本研究部会のテーマにある「博物館と地域が協働して課題に取り組む事例」を支援する具体例ともいえる。

事例調査にあたっては、助成プログラムのご担当者である、花王株式会社社会貢献部・相澤麻希子様、特定非営利活動法人市民社会創造ファンド・神山邦子様インタビュー及び質問紙による調査にご協力を頂いた。

(1) 助成プログラムの概要

助成プログラムは、2005年から検討が始まり、2007年から開始された。助成プログラムの目的は、「地域に根づいたミュージアムを拠点とした市民活動を応援することで、ミュージアムに活気が満ち、市民の活動が育つとともに、地域の文化が発展することにある。

(2) 助成プログラムの特徴

主な特徴は、第1に「萌芽的な活動」（「資金的な制約等から望むような活動が難しい」状態）の育成を支援していること。第2に、助成金による支援だ

けではなく、同時に活動する機会や団体間の交流機会を提供することを通じて、活動と団体の育ちを期待していること。第3は、主体性は市民活動団体にあり、あくまでも活動を「見守る」こと、である。

(3) 助成を受けた団体から挙げられた課題（「ミュージアムとの関係性」をめぐる課題）

第1は、ミュージアムとイベントで連携する際の制約（日程、時間、場所、内容）。第2は、ミュージアムの職員との連携（例えば、専任の担当者がいない場合の展開への制約、担当者の異動による影響、担当者の過剰負担への心配）。第3は、受け身がちな意識のミュージアムとのプロジェクトの進め方。

(4) 考察

最後に、最初の問題関心に立ち返り、ミュージアムと市民による活動を成立・定着させるために、市民活動団体とミュージアムに何が必要とされるのかが提起された。

(3) で挙げられた課題は、萌芽的な活動であればこそ生じる必然的な課題である。助成プログラムの対象・主体性は、市民活動団体にあるとされている。しかし、一方のみの努力や変化には限界がある。異質なルール・専門性・使命を持つ者同士が共に行うプロジェクトであるからこそ、各々の意識や価値観がプロジェクトを通じてどのように変化したのか、プロジェクトが各々の活動にどのように還元／展開されていくのを見守っていく必要がある。

市民活動団体は、ミュージアム側の体制や役割に対する理解が必要である。新たなプロジェクトであっても、ミュージアムが行っている既存の調査研究や教育普及／交流活動に、プロジェクトの経験や成果が繋がっている／つながっていく回路を意識的に見出す（つくり出す）必要がある。ミュージアム側は、ミュージアムの目的・役割に沿うことを確認した上で、事業活動の一環としてプロジェクトに取り組まなければ、継続性は担保されにくい。

4. コミュニティ放送を用いた地域と博物館の連携の可能性 江水 是仁（東海大学）

- ・地域住民が主体的に学ぶ機運の増加。持続可能な地域社会を作り出す担い手→よりよく生きる。コミュニティ放送が有効であると思われる。
- ・1991年7月臨時行政改革推進審議会「国際化対応／国民生活重視の行政改革に関する第三次答申」などにより、地域の個性を十分に発揮した、多様



で創造的な地域づくりが提唱された。コミュニティ放送とは、地域の特色を生かした番組や防災、行政、産業、観光等の情報伝達を行い、地域情報の発信拠点として豊かで安心なまちづくりに貢献できる放送局（1992年制定）。

- ・これらの活動は、地域博物館の姿と重なる。→FM世田谷（83.4MHz, www.fmsetagaya.co.jp）で、地域住民（主に世田谷区民）が番組制作に関わった事例を通して考察。（可聴範囲300万人、世田谷区80万人）。
- ・番組制作過程の説明（1年間アナウンスの基礎を終了。半年間番組企画制作・放送機器操作技術取得…修了者対象で30分の枠を確保。）。
- ・番組「セタガヤ・ルーチュ」：世田谷区民が世田谷区の都市の歴史（地図をもとに）などを研究取材考察し、その成果を番組で放送。例えば暗渠化された中小河川の水源地調査、直角に蛇行している川、その理由などを調査、フィールドワークを行い、放送する、→地域の歴史を番組制作を通して理解。
- ・時間軸／空間軸を共有している人の活動。地域のまとまりを作る活動。
- ・コミュニティ放送の定義に基づく活動は、特に地域博物館の活動の定義に類似する部分があると思われる。その地域の魅力を見つけ出し、取材して調べた結果を放送する行為は、博物館における資料の収集・調査・展示という行為と類似しているからである。また、それらの活動も、今までは学芸員が中心で行われてきた。番組制作に市民が参画することで、博物館の機能を市民と共有できる可能性が大きい。
- ・番組制作に関わった市民は、よりその地域を学習する、生涯学習としての機能を果たしていると思われる。また、番組のリスナーも、それらの情報を受け取ることにより、その地域に関する知識や関心を深めることができると思われる。また博物館学芸員も、博物館館内で活動を展開する以外に、

その地域にあるコミュニティ放送の番組制作に積極的に関わり、学芸員としての活動の成果を、放送を通して伝えていくことで、博物館活動の可能性が広がり、地域との繋がりを築くことができると思われる。

リスナー（から）の反応、フィードバック、働きかけをどう確保するか。博物館の脱構築的役割もっている。

5. 来館者の学習体験を理解する

—ミュージアム・リテラシー構築の観点から—

並木美砂子（千葉市動物園）

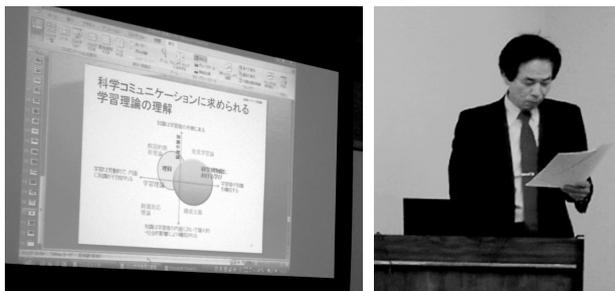


- ・博物館が来館者の学習体験を理論的に理解する。
- ・はじめに：学芸員養成課程において、「博物館教育」が必修となる。博物館における教育の機会の提供は、多様な来館者の主体的な学習とどのように関連させていくことができるだろうか。博物館の専門職として学芸員が共通してもつべき博物館教育の素養について、博物館側がもつべき「ミュージアム・リテラシー」構築の観点から考える。
- ・博物館の教育的価値の探求：来館者が、博物館利用において体験することがらの中で、「教育的価値」があると言えることとは何か。来館者が「確かに学んだ」と自覚できることと、博物館での体験との間にはどのような関係があるか。それはどのように知ることができるか。
- ・教育と学習に関する理論：教育、学習、それぞれの理論には、近代から現代にかけての教育思想史と、異なる知識観の存在が反映している。それを対比させ図式化してみることで、博物館教育に携わる者は、自らの活動の位置や方向を確認できる。博物館側が来館者を理解することに来館者研究の目的と価値がある。何が来館者の学習体験かを知るためのコメント分析や博物館利用状況の把握は、利用方法を知り、散りばめられている体験を自覚的に結びつけていく手助けとなる。来館者調査→リテラシー。

- ・リテラシー構築との関係：以上は、博物館側がもつべき「ミュージアム・リテラシー」構築の一環と言える。博物館の社会的な価値は、来館者による多様な「利用」のされかたを知り、学習体験として見ていける視点をもつことでより高まる。博物館側が自らの教育的可能性を高めていくという意味でのリテラシーは、来館者理解の深化とともに変化・発展する。
- ・知識に関する理論：観念論／実在論。
- ・学習理論：伝達・吸収モデル／能動的・発達のモデル 刺激－反応理論 意味の創出・スキーマの転換
- ・それぞれの立場からのアプローチ例：知識は学習者の内面において構成される。／知識は学習者から独立して存在する。
- ・次のステップに踏み出すことを前提として自覚をいれた。学んだと自覚すること、自覚しないで結果的に学んで行動が変わるのもあるのに自覚を強調したのは、ほかから指摘されるか、自覚が伸びたこと。文学作品を読んだ個人としての学びも、社会的関わりと位置づけている。ブルーナー、ナラティブ、内的世界の構築。
- ・ジョージ・ハイン著「博物館で学ぶ」2010。（同成社）が参考になった。

6. 議論：地域と協働するミュージアムのリテラシーとは

高安 礼士（全国科学博物館振興財団）



まず、ミュージアム・リテラシーに関する以下の話題提供を行った。

- ・ミュージアム・リテラシーは、主体的に博物館を活用する能力。内部のリテラシー・外部のリテラシーに分けられる。
- ・日中韓のフォーラムを先週開催したが、国が民を導くという発想から逃れられない。観光／中韓と行うと思もしない方向へ向かうこともあるので、注意は必要。欧米の博物館ら学んだことの意義を再確認する必要があるだろう。

- ・地域の拠点としての博物館 外部からみたときの拠点としての博物館。観光施設として成り立つか？
- ・「個人的文脈への理解」「地域の課題に答える」「地域外連携の視点」も必要である。「MLCA等との連携」「観光資源としての博物館」「情報発信能力」「外部へ解放していく能力」→博物館職員に求められるミュージアム・リテラシー
- ・当該博物館が文化、観光、環境保護等による地域の活性化と（地域外へも）情報発信に貢献できるようにつとめる…法令だどこまで。博物館活動はこれから広がる。博物館を運営する視点から、さらに外に広げていきたい。
- ・「地域と共同する博物館」リテラシー 政治・経済・事業経営等の社会リテラシー
- ・これまでJMMAでは、Museum Management：を「Mission」、「Collection Policies」、「Communication Policies」を「Administration Theories」として再構築した。（By Hoopergreenhill 2002.）
- ・配布資料の表は2003年の時点の視点。全体の図も含めて書き直す必要はあるが、全体像の中で議論している内容の位置を確認できる。

これまでの発表も受ける形で意見交換が行われた。

- ・（フロア）支援プログラムの選考委員として成果報告を聞いてきた。その枠の外側からの視点が得られた。あるいは、情報を提供していく段階にきたと思った。花王は、これまで美術館連絡協議会へ助成してきたが、地域博物館で活動している地域市民への助成（「花王・コミュニティミュージアム・プログラム」）へ取り組むこととした。当該プログラムは、博物館に関わる市民を応援することが目的。4ページ、3領域の重なり図、市民としての素養と学芸員としての資質が重なる領域、ここに注目している。このところの関係性、今日はとてもきれいな形だった。もっと、ドロドロしたものがある。市民に意欲はある。代表的例として平塚市の博物館の市民団体。まだ、中向き。外との連携はない学習集団。今日の発表でみられた団体は、かなり外に開いている。そういう団体は、博物館にとってどうなのよ?! もし、学芸員や博物館サイドが利用価値がないと考えたら、市民団体が育っていかない。博物館で活動しているけれど、博物館で活動できない事例もある。博物館側の意識が育っていない場合がある。お互いの立場をすりあわせて、博物館で市民を育てる、市民が育っていくことを進めなければならない。市

民が見捨てれば、博物館は衰亡していく。

- ・(高安) 博物館が直接成果をもたらす活動を行うべきかどうか。貸し会場のような活動は行政的に認められない。一部の方々の利用のみが強まるのは困るという発想はあるのではないか。
- ・(フロア) 市民は生き生き、博物館側の人間は出てこない。山梨はうまくいっている。
- ・(高橋) 館がミッションとしてそこまで言えているか、というところまではなかなかいかない。実践をして、外が評価をすることによって、中で認められてくるというのが現状か。
- ・(高安) 他の県や地区ではどうですか？
- ・(フロア) 市民側からの、アプローチはまだない。
- ・(高橋) 市民からいきなりアプローチしてくることはそう多くはなく、きっかけ作りやウェルカムという発信は博物館側からする必要があるのでは。
- ・(小川) 外から評価されることで後から認知の手法だけでよいかは考えている。コンフリクトを繰り返して定着させていくしかないのでは。成功例は発表できるが、途中の方はなかなか発表できないのでしょうね。
- ・(高安) どこでも時代の最先端をいくときはそうですね。行政内部でも、立場によって違う。
- ・(小川) 相互作用によって動いていくことの理解。事例だけで突っ走るのではなく、枠組みをきちんと示せると、行政としては安心できる。
- ・(フロア) 友の会がNPO法人化して、つなぎ役になる。その法人が、雇い入れた人を館に派遣したりしている。まとめ役をやっている。…、思い出した。
- ・(高安) 行政の方から作ったのが、千葉県の生物多様性センターなどは博物館が直接社会への貢献を目指す活動と考えられる。
- ・(フロア) 市民が博物館を助けているものについても助成している。市民が博物館の運営者の主体者となってきているという状況も見られてきている。それによって市民社会につながる。
- ・(フロア) 市民として33~34年前、研究者に任せなさいといわれた。佐用町の昆虫館、人と自然の博物館の研究者が中心となって市民がなんとかしてオープンした。そのとき、災害で壊滅状況。町でないところにある。市民はその博物館が大切だと思っていなかった。研究者は大切だと思っていた。…人間関係の構築。交流館、複合館の役割が強くなっている。昔の家庭で普通にあったことを地域

社会でも家庭でもやらなくなったことを博物館がやる。…いろいろある。(博物館の方が) がんばってほしい。思い切って市民を受け入れてほしい。キャパでボランティアを制限している。

- ・(高安) 人が好きな学芸員や資料(だけ)が好きな学芸員などがいますね。科博のボランティアの方はどのようなご意見ですか？
- ・(フロア) 東博はなぜ3年間？
- ・(フロア) ボランティアの中で、いろいろな弊害が出てきた。3年空白をおけばまた戻れる仕組みはある。
- ・(高安) ボランティアの人の社会リテラシーの高さがあるのでしょうか。
- ・(フロア) ボランティアはそれなりの大人数を募集しているが、倍率はかなり高い。
- ・(高安) 細かい理論でいうと、小川さんの学習理論の「領域2」ですね。
- ・(フロア) 質問/意見。ぶつかった壁。属人的な部分。京都国立近代美術館と一緒にいった。美術館側ともめた。学習支援の概念に関するコンセンサスがとれていなかった。直前でひっくり返った。博物館という箱は誰のもの、コレクションは誰のもの、ミッションは誰のもの…それを扱える力がグループになかった。市民側の力不足の自覚。行けば扉が開かれるものではない。
- ・(フロア) 本質的なところで同じ？
- ・(フロア) 最初は受け入れてくれるはずだったのに、制度で引っかかる。
- ・(フロア) 利用者がリテラシーを持たなければならない。
- ・(フロア) 美術館=道具をどのように使うか。近美は答えてくれた。
- ・(フロア) 市民サポートにそっぽ向かれたら成り立たない。
- ・(フロア) 市民が直接。
- ・(フロア) 市民と博物館の対立構図ではないようにしなければならない。
- ・(フロア) コンフリクトがおこることが重要。コンフリクトの情報を共有しましょう。失敗例を共有しましょう。失敗に学ぶ。
- ・(フロア) 嫌なところこそ学ぶ。
- ・(高安) 次回は、英国のレスター大学の Viv Golding 氏を呼んで、4月9日科学技術館で開催予定。
- ・(小川・まとめ) 公募。狙いを汲み取っていただけ。最後の議論は、興味深い。プロセスとしてのミュージアム・リテラシーもあると思う。

実践部門研究部会

平成22年度
第1回研究会
開催報告

テーマ：博物館における評価活動とその課題

日時：平成23年3月5日（土） 13：30～17：00

会場：科学技術館 6階第1会議室

主催：日本ミュージアム・マネジメント学会

協力：科学技術館

開催の趣旨

田代 英俊（科学技術館）

JMMA実践部門研究部会では博物館での実践を踏まえた博物館活動の理論構築を目指している。

今回テーマとして掲げた博物館評価、来館者評価については、様々な報告や議論、実践事例があるが、まだまだ研究の途上であり、定番的な手法の確立にはいたっていないのが現状である。そこで本研究会ではミュージアム・リテラシー育成の視点から、どのような評価活動が博物館活動の検証に有効であるか、一般の方々の実態把握に有効であるかを、事例を踏まえて意見交換することとした。特に、評価における解析のプロセス、解析手法から見えてくる課題に着眼して議論を深めた。

以下、発表内容を報告する。

博物館の評価活動を行うために
必要な社会調査の基礎

東京大学大学院教育学研究科

小山 治

本発表の目的は、社会調査に関心のある初学者（特に実務家）の方々に対して博物館の評価活動を行うために必要な社会調査の基礎的な事項を解説することである。

本発表では、初学者が抱くと思われる社会調査に対する疑問をあらかじめ設定し、それに答えるという構成を採用した。その構成部分は、大きく分けて、次の9つであった。

第1に、「社会調査とは何か」という疑問に答えた。ここでは、社会調査を「一定の社会集団に生じる諸事象を定量的または定性的に認識するプロセス」と定義し（岩永ほか編 2001：11）、社会調査を①量的調査（例：質問紙調査）と②質的調査（例：聞きとり調査）に分類した。

社会調査とは何か

○定義

- ・「一定の社会集団に生じる諸事象を定量的または定性的に認識するプロセス」（岩永ほか編 2001：11）。

○種類

- ・量的調査（定量的調査）
 - 質問紙調査（調査票調査）。
 - 既存の統計データの分析。
- ・質的調査（定性的調査）
 - 聞きとり調査（インタビュー調査）。
 - フィールドワーク（参与観察等）。
 - 生活史法（個人や集団の生い立ちを自伝・日記等の資料をもとにして分析する方法）。
 - 言説分析（本、雑誌、新聞記事、広告記事等の文字情報の分析）。

第2に、「社会調査は有効なのか」という疑問に答えた。ここでは、社会調査の有効性として、社会現象に関する常識を疑うことで①実態や②因果関係をより正確に知ることができるという点を指摘した。また、社会調査の有効性の具体例として、近年、凶悪な少年犯罪や児童虐待は増加していないこと、1990年代以降、「ニート」はほとんど増加していないことを示す実証的なデータを紹介し、常識に囚われないようにすることの重要性を指摘した。

第3に、「質問紙調査を実施する前に必要なことは何か」という疑問に答えた。ここでは、①調査目的を設定すること（何を明らかにしたいのかを徹底的に言語化すること）、②調査目的を達成するための問い（実態に関する問い・因果関係に関する問い）を立てること、③仮説（問いに対する答えの予想）を

質問紙調査を実施する前に必要なことは何か

○調査目的を設定する

- ・何を明らかにしたいのかを徹底的に言語化する。

○問いを立てる

- ・調査目的を達成するための問いを立てる。
- ・社会調査の種類によって解明できる問いは異なる。
- ・問いには、①実態を問う形式の問いと②因果関係を問う形式の問いがある。

○仮説を立てる

- ・問いに対する答えの予想。
- ・仮説は、概念レベルと作業レベルで考える。
 - 概念とその代理指標（＝観測可能な指標）を整理・検討する。
 - 概念の操作的定義を明確化する。

立てることを指摘した。仮説には、概念仮説（概念レベルで表現された抽象的で汎用性の高い仮説）と作業仮説（実際に観測することによって検証することができる仮説）があるという点を指摘した。

第4に、「問いを立てるにはどうすればいいのか」という疑問に答えた。ここでは、実態を問う際には「どうなっているのか」（記述に対応）という問いを立てること、因果関係を問う際には「なぜ」（説明に対応）という問いを立てることが基本となるという点を指摘した。因果関係を確定するには、①原因の時間的先行、②共変関係、③他の条件の同一性といった3つの要件を満たす必要があるという点を説明した。仮説については、概念仮説と作業仮説の区別・対応関係を図示した。

問いを立てるにはどうすればいいのか

○問いの種類を理解する

- **実態**を問う形式の問い。
 - 「**どうなっているのか**」。
 - 「**記述**」に対応する。
- **因果関係**を問う形式の問い。
 - 「**なぜ**」。
 - 「**説明**」に対応する。
- 因果関係を確定するには、3つの要件を満たさなければならない。

因果関係を確定するための3つの要件

- 次の3つの要件を満たさない限り、因果関係があるとはいえないので、特に注意する。
 - ①原因の時間的先行
 - 原因は結果よりも時間的に先行していなければならない。
 - 意識変数と意識変数は、どちらが時間的に先行しているか不明確な場合が多い。
 - ②共変関係
 - 原因とみなされている現象も、結果とみなされている現象もともに変化しているのが確認できる。
 - ③他の条件の同一性
 - 原因以外に重要と思われる他の要因が結果に対して影響していない。
 - データを分析・解釈する際、重要な論点となる。
- 「なぜ」という問いを立て、その仮説を考える場合、**独立変数（原因要素）と従属変数（結果要素）を設定し、以上の3つの要件すべてを満たしているか必ず確認しなければならない。**
 - 独立変数は最低でも2つ以上考えなければならない。

第5に「どのような調査方法をとればいいのか」という疑問に答えた。ここでは、全数調査と標本調査の相違点、標本調査の基本的な考え方、母集団の決定、標本の抽出方法、有効回収数・率の大まかな目安について説明した。

第6に、「質問紙を設計するにはどうすればいいのか」という疑問に答えた。ここでは、①質問紙の構

成を決める、②質問形式を理解する（例：単項選択式、多項選択式、分岐式）、③選択肢の性質を理解する（例：名義尺度、順序尺度）、④ワーディング（言い回し）に注意するといった事項について説明した。ワーディングについては、選択肢の網羅性・相互排他性、曖昧な言葉・ステレオタイプな言葉、ダブルバーレルの質問、インパーソナルな質問とパーソナルな質問の区別、イエス・テンデンス、質問文の前提の偏りといった事項について、具体例を挙げながら説明した。

質問紙を設計するにはどうすればいいのか

○構成を決める

- ①調査目的と関連する質問項目、②フェイスシート項目（属性）を回答しやすい形で配置する。

○質問形式を理解する

- 単項選択式。
 - 選択肢は、網羅的で相互排他的にする。
- 多項選択式（複数回答式）。
 - 処理が複雑になるので、原則として、作成しない。
- 分岐式（サブクエスチョン式）。
 - 明確な根拠がない限り、原則として、作成しない。
 - 分岐は1回に留める。

分析方法から逆算して質問形式を決定する。

○選択肢の性質を理解する

- 名義尺度（例：性別）、順序尺度等。

○ワーディング（言い回し）に細心の注意を払う

ワーディングに関する主な注意事項

- 質問文の選択肢は**網羅的（必要十分）**か。
- 質問文の選択肢同士は**相互排他的**か。
- 質問文に**曖昧な言葉、ステレオタイプ化した表現**が使われていないか。
- ダブルバーレル**の質問（1つの質問文に2つ以上の回答対象が入り込んでいて回答できない質問）になっていないか。
- インパーソナルな質問とパーソナルな質問の区別**ができていないか。
- イエス・テンデンス（黙従傾向）**の質問になっていないか。
- 質問文の**前提**が偏っていないか。

第7に、「データ入力の方法はどうすればいいのか」という疑問に答えた。ここでは、具体的なデータ入力のフォーマットを示した。

第8に、「質問紙調査データを分析する方法にはどのようなものがあるのか」という疑問に答えた。ここでは、①度数分布表と②クロス表を作成する必要性を指摘した。①は実態に関する問いである「どうなっているのか」に対して答えるために作成する必要がある、②は因果関係に関する問いである「なぜ」に対して答えるために作成する必要があるという点を指摘した。

質問紙調査データを分析する際の方法にはどのようなものがあるのか

○度数分布表(単純集計表)を作成する

- 実態を問う形式の問いである「どうなっているのか」に答えるため。
- 調査結果の「記述」に対応する。
- 変数間の関連はわからない。

○クロス表を作成する

- 因果関係を問う形式の問いである「なぜ」に答えるため。
- 調査結果の「説明」に対応する。
- 変数間の関連がわかる。
 - 独立変数と従属変数の間に因果関係があるか否かを検証できる。

第9に、「質問紙調査データから因果関係に関する仮説を検証するにはどうすればいいのか」という疑問に2つの視点から答えた。1つ目の視点は、2重クロス表だけではなく、他の条件の同一性を担保するために3重クロス表を作成することが重要であるという点である。3重クロス表の解釈では、行の周辺分布と列の周辺分布に着目する必要があるという点を指摘した。2つ目の視点は、(有効な標本調査の場合には)統計的検定を行う必要があるという点

質問紙調査データから因果関係に関する仮説を検証するにはどうすればいいのか

○2重クロス表に加えて、少なくとも3重クロス表を作成する

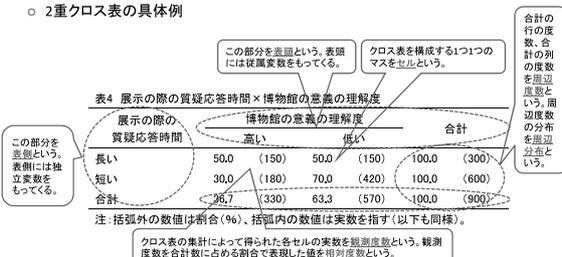
- 統制変数を投入しても(=他の条件を同一にしても)、独立変数と従属変数の間に関連が残れば、両者の間に因果関係がある可能性が高まる。
- 2重クロス表を作成しただけでは、他の条件の同一性が担保されていない。

○統計的検定(クロス表分析の場合、独立性の検定)を行う

- 独立変数と従属変数の間にみられる関連が偶然の結果なのか否かを確認する。

クロス表(分析)とは何か

- クロス表とは、複数の変数の同時分布を表で表したものである。クロス表には、2重クロス表と多重クロス表がある。
 - 2重クロス表とは、独立変数と従属変数の2変数の関連のみをまとめた表である。
 - 3重クロス表とは、上記2変数の他に、原因となりうる別の重要な変数(統制変数または第3変数という)を加えて集計した表である。
 - 4重クロス表以上もあるが、結果を読みとるのが難しくなる。
- 2重クロス表の具体例



統計的検定とは何か

○定義

- 「母集団について分析者が持っている仮説が正しいといえるかどうかを、標本の分析から判定する手続き」(岩井・保田 2007: 140)。
- クロス表分析の場合、統計的検定の中でも独立性の検定を行う。

○意義

- 質問紙調査データを集計したクロス表においてみられた独立変数と従属変数の関連が偶然によるものなのか、または偶然とはいいいがたいものなのかという点を確認することができる。
- 統計的検定を行わなければ、クロス表においてみられた独立変数と従属変数の関連が偶然生じたという可能性を評価できない。

である。統計的検定とは、「母集団について分析者が持っている仮説が正しいといえるかどうかを、標本の分析から判定する手続き」のことである(岩井・保田 2007: 140)。以上を踏まえた上で、3重クロス表と統計的検定を意識したクロス表の解釈を実践した。

なお、聴衆からは、①適切性が判断しにくい有意抽出法による調査データから有効な知見を導き出せるのか、②クロス表分析によって因果関係を検証できるのかといった質問が出された。

①の質問に対しては、標本の抽出方法が無作為抽出法ではないことや分析結果を一般化することには慎重にならなければならないことを明記した上で、調査結果をまとめることが誠実な姿勢であるという回答をした。②の質問に対しては、確かに、クロス表分析のみでは、自然科学の文脈でいうような厳密な因果関係は検証できないが、多重クロス表分析を行うことで、因果関係に近づけると回答をした。また、個人に対する質問紙調査データでは、厳密な因果関係の検証は難しいものの、重回帰分析等の多変量解析を行うことで、因果関係に関する議論を行うことは可能であるという点を補足した。

【文献】

- 岩井紀子・保田時男, 2007, 『調査データ分析の基礎——JGSSデータとオンライン集計の活用』有斐閣。
- 岩永雅也・大塚雄作・高橋一男編, 2001, 『社会調査の基礎(改訂版)』放送大学教育振興会。

【付記】

掲載資料は研究会当日配布資料より抜粋したものである。なお、若干の修正を行っている箇所がある。

科学技術館における教育プログラムの効果測定手法に関する調査研究事例について

科学技術館 田代 英俊
中村 隆
小林 成稔

科学技術館では、科学館における教育プログラムの効果をより向上させるために必要となる評価手法の研究に取り組んでいる。これまでも数多くの教育プログラムを実施してきたが、それらの経験をもとにすると、客観的な評価をおこなうためには以下のポイントが適切に考慮されている必要があると考えられる。

- ① 取り上げるテーマや分野についての来館者の意識や学習度の把握
- ② プログラムの効果を測る基準の明確な設定
- ③ プログラムの効果の測定手法の設定

この考えに基づき、平成21年度に科学技術館電力展示室「DENKI FACTORY」にておこなった調査研究においては、「環境・エネルギー」をテーマに取り上げた教育プログラムを対象とし、まず来館者の環境およびエネルギーについての関心度と学習度についてアンケート調査をおこなった。その結果、来館者は環境とエネルギーについて、関心は高いがこれまで学習機会はあまりなかったと感じていることがわかった。次に、教育プログラムの効果を測る基準

を検討するために、このような意識を持った来館者が「環境・エネルギー」に関する展示を体験したときの効果についてアンケート調査をおこない分析した。分析では、「展示への満足度」と「展示による興味の喚起度」、「展示による知識の獲得度」に注目し、これらの相関を調べたところ、これら3つの間には相関があることが示された。つまり、「展示に対する満足度」を上げるためには、「興味の喚起度」もしくは「知識の獲得度」をあげればよいということである。以上の結果をもとに試行をおこない、演示の前後に来館者に対してクイズを出題することで「知識の獲得度」の上昇を指標化し、演示手法を改良することで教育プログラムの効果を向上させることができることを確認した。

この実験に続き、平成22年度より館内で常時おこなっている実験演示に参加後、来館者が自宅で復習をおこなうためのサイト「お家で復習」(<http://obenkyo.jsf.or.jp>)を公開している。このサイトでは、演示参加後に配布するログインカードを持ち帰り、そのカードのIDを使ってログインし、解説付きで動画を閲覧して復習する。途中でクイズが出題され、これに答えながら閲覧を続けることで来館者の「知識の獲得」を補完するとともに、解答結果をスタッフが確認できるようになっている。今後、このシステムを改良していくことで、各演示において教育プログラムの効果が出ているか測定し、フィードバックをおこなうことができる仕組みを構築していきたいと考えている。

Copyright (C)2010 Science Museum, ALL RIGHTS RESERVED

お問い合わせ ページの先頭にもどる

お家で復習 (<http://obenkyo.jsf.or.jp>)

博物館・展示評価の手法としての 観覧行動追跡調査の可能性

東海大学 江水 是仁
葛西臨海水族園 西 源二郎
横浜国立大学 大原 一興
目白大学 藤谷 哲
千葉市動物公園 並木美砂子

はじめに

筆者らは、以前より水族館、自然史博物館、科学館などにおいて、来館者の観覧行動を調査してきた。そこでは、来館者が示す観覧行動の変化要因を探り、その変化の発生につながる博物館活動を行うための条件などを考察した

今回、展示環境や展示目的等の異なる博物館—東海大学海洋科学博物館・自然史博物館、山梨県立博物館—において、①来館者自身の知識や興味、来館同伴者などの諸条件の違い、②観覧が来館者に与える影響、を明らかにするために、来館者の観覧前後で興味関心の変化を把握するためのアンケート調査や観覧後の印象や記憶を聞き取る調査、ガリバーマップ、そして観覧行動追跡調査を行った。今回、これらの調査結果の一部をもとに、博物館や博物館の展示評価の手法としての観覧行動追跡調査の可能性を考察する。

観覧行動特性の類型化

東海大学自然史博物館（以下自然史博）や山梨県立博物館（以下県博）で行った観覧行動追跡調査の結果、観覧行動を視覚や触覚の利用割合から、以下の4つに類型化することができた。

表1 観覧行動特性の類型

視覚重視型	ハンズ・オンに触れてはいないがハンズ・オン付近の展示での観覧時間が長くなっている。属性としては恐竜への興味・関心のない割合が大きい
触覚重視型	触ることのできる展示物の前で極端に観覧時間が長く、典型的なハンズ・オン目当ての観覧行動が見られた。来館回数が5回以上の割合も最も大きく、ハンズ・オン展示に触ることに慣れているからであると考えられる
視覚触覚利用型	最初の展示からしっかりと見ていく傾向にあり、様々なタイプの展示にも柔軟に対応している
通過型	どの展示物にも大した興味を示さず、展示数、観覧時間ともに少ない

自然史博では、どの類型も同じ位見られたが、ハンズ・オン展示で多く構成されている県博では、特に通過型が多く、分布に大きな偏りが見られた（表2）。これらの違いは、展示物の違いにもよるが、県博の展示は明確な区切りが無い空間構成のため、歩きながら観覧しやすく、結果として立ち止まらない通過型が増えたと考えられる。

表2 類型該当者の分布 自然史博N=43 県博N=27

	視覚重視型	触覚重視型	視覚触覚利用型	通過型
自然史博	28%	16%	28%	28%
県博	11%	4%	33%	52%

展示配置と観覧集団の違いによる行動特性

ハンズ・オン展示をまとめて配置するか、分散して配置するかによる行動特性の違いを、県博における団体観覧者、個人観覧者との間で比較すると、表3のような特徴があった。

表3 展示の配置の違いと団体・個人観覧者の行動特性

団体・集中	展示の1つとして展示の流れに組み込まれてしまうため、一度飛ばすと気付かずに終わる傾向があるが、気付けば観覧時間も延びる
団体・分散	ハンズ・オンと出会う機会が多いことにより気付く可能性が広がる。また展示が分散されていることで見比べる行為も増え、戻り回数も増加するがその他の展示への観覧時間は短縮
個人・集中	並列することで2つのハンズ・オン展示を比較することへの誘導が行われ、興味関心への誘発が起りやすい
個人・分散	各々が展示の流れの一つに組み込まれ、展示同士の関連付けが行われにくく、比較行動はあまり見られない

まとめ

観覧行動追跡調査に観覧前後のアンケート調査、聞き取り調査を加えて行うことで、評価の一手法として観覧行動（観覧時間や観覧回数など）を把握することの意義を示すことができた。

評価活動を評価する

—公立博物館への ヒアリング調査から (中間報告)—

北海道大学大学院文学研究科
佐々木 亨
静岡県立美術館 泰井 良

この報告は、科学研究費補助金・基盤研究 (C) 「公立ミュージアムでの評価導入・運用の検証と「評価パッケージ」の提案」¹⁾による初年度の調査報告である。ここでは、評価をすでに導入している、または具体的に導入を検討している館における評価の有効性や評価運用上の課題を明らかにする。

1. 調査対象と内容

本調査では、評価の有効性や運用上の課題を詳細に知るため、以下の12館・組織に対して、ヒアリング調査を行った。ヒアリング項目は、a) 自己点検・第三者評価の概要、いままでの経緯、b) 評価運用のための予算・体制・作業量、c) 行政が実施する各種評価との関係、d) 評価の位置づけや目的、e) 評価を継続するための課題の5項目である。

〈ヒアリング対象館・組織〉

横浜市ふるさと歴史財団、東京都写真美術館、川崎市市民ミュージアム、山梨県立博物館、豊田市美術館、斎宮歴史博物館、京都文化博物館、(財) 大阪市博物館協会、広島市文化財団 (広島市郷土資料館)、徳島県立博物館、高松市美術館、香川県立ミュージアム

2. ヒアリング調査結果

ヒアリング調査結果として、d) 評価の位置づけや目的では、次のような回答が多かった。評価とは「職員の意識を変える気づきの場」7件、「モチベーションを高める仕組み」2件、「事業全体での仕事の位置づけが明確になる。仕事の意味を考える役割」2件である。

また、e) 評価を継続するための課題として、次のような回答が多かった。「適当な第三者評価委員がない、または少ないこと」5件、「特定の職員が異動になったあと、運用ができなくなること」3件、「当初の意志が薄れてきて、評価活動がマンネリ化・形式化していること」3件、「作業量が多く、仕組みが複雑すぎる」3件、「評価結果と予算・人事の

議論が別物になっていること」3件である。

3. 中間的な考察

我が国において博物館に評価が導入された当初、「使命に基づく経営を支えるツール」、「利用者・納税者への説明責任の場」という捉え方が支配的であったと考える。しかしながら、調査結果から、職員の意識やモチベーション向上のために行うといった、極めて内部的な位置づけ・目的になっていることを読み取ることができる。また、評価を継続するための課題からは、評価を設計する際に重要とされてきた「評価の枠組み」、つまりどのような評価指標を設定するか、自己点検と第三者評価をどのように組み合わせるかといった事柄だけでは、評価活動はうまく運用できないことが分かった。

評価導入当初の位置づけや目的を指向するためには、評価結果と予算・人事とのリンクの構築、評価活動が特定の職員のみしか行うことができない状況からの脱出 (評価の非属人化)、第三者評価委員の育成といった課題を解決して、「評価の枠組み」を再構築する必要があるのではないだろうか。

註

- 1) この研究は、公立ミュージアムにおける評価導入・運用の実態を調査し、課題を明らかにする (H22-23)。その上で、公立ミュージアム向けの「評価パッケージ」を提案し、試行する (H24-25) ことを目的としている。

日本博物館協会の「博物館自己点検」、「自己評価システム」の意味

文化環境研究所
高橋 信裕

■はじめに

日本博物館協会は、各館の自己点検・自己評価支援を目的に、以下の「博物館評価システム」を開発し、現在その成果を「博物館自己点検システム」として、Web上に公開している。

- ① 博物館評価システム・導入版 (平成18年)
- ② 博物館評価システム・詳細版 (平成18年)
- ③ 博物館評価システム・標準版 (平成19年)
- ④ 博物館自己点検システム (平成20年)

平成20年度以降は、さらに多くの館がよりの確な方針・方向で自己点検・自己評価に取り組むことができるよう「導入版」を改訂し、「博物館自己点検システム・Web版」としてWeb上に公開している。

■「評価システム」から「自己点検システム」への名称変更

博物館評価システムは導入版（平成18年）の開発以来、3度にわたり改訂されてきたが、4度目にあたる平成20年のWeb版では、名称が「自己点検システム」と変更されている。この名称の変更は、当然と言えるもので、実際内容的にも「評価」というより、博物館事業の棚卸の性格を帯びており、「点検」といった表現が相応しい。評価システムであるならば、目標値などの設定とともに達成度の目安や度合いが明示され、その成果との関係が評価につながるわけで、内容的には「点検」の域を出ていない。ただ、それぞれの館の体制、運営、事業等の現況をチェックするには、手短かに、またわが国の実情に合った設問が網羅されており、関係者には利用しやすくなっている。従来の「評価システム」を「点検システム」と正したことで、却ってこのシステムの果たす役割が明確になったと言えよう。

■わが国の「博物館事情」が反映された点検項目

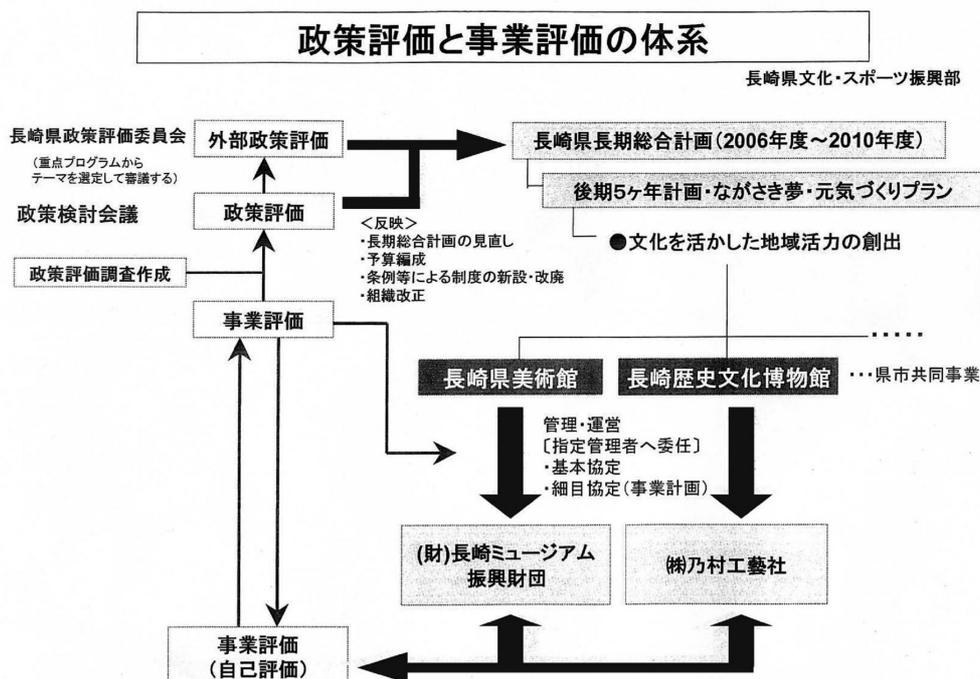
日本博物館協会の自己点検システムは、8つの項目に分けられ、その項目ごとにチェック細目が挙げられている。すなわち8項目は〈館長・館の経営責

任〉、〈利用者・市民・地域との関係〉、〈展示〉、〈教育普及〉、〈学芸員・一般職員〉、〈調査研究〉、〈資料・コレクション〉、〈施設・アメニティ〉であり、チェック細目は、YESかNOで回答するようになっている。例えば、〈館長・館の責任〉では、「館長が常勤か」についてYESかNOかで答えるようになっており、その設問内容についても、また他の〈学芸員・一般職員〉での「常勤の学芸員が配置されている」か、「学芸員の採用にあたって学芸員資格を要件としている」か等の設問が自己点検の項目に挙げられていること自体、わが国の博物館の水準が低レベルにあることに気づかされる。

■「自己点検システム」等をベースに立ち上げた長崎の「評価システム」例

長崎県では博物館施設を2館所有している。一つは県単体で設置した「長崎県美術館」、あと一つは長崎市と共同で設置した「長崎歴史文化博物館」である。この2館の評価システムに日博協の「自己点検システム」等が参考にされ、県独自の「評価システム」を立ち上げている。自己点検と自己評価の双方を満足させ、しかも政策との整合を評価検証する仕組みに特徴が伺える。2館とも「指定管理者制度」を導入している。

日本博物館協会の「自己点検システム」が、博物館評価のトリガーとなって、博物館の改善が現場レベルで、着実に定着しつつあることは間違いなことである。



支部会だより

関東支部

エデュケーター研究会報告

第4回 エデュケーター研究会報告

日時：2010年11月1日（月）

場所：国立新美術館

報告：美術出版社「美術検定」実行委員会
事務局 高橋 紀子

第4回の研究会は、京都造形芸術大学（以下、京都造芸大）教授の福のり子さんを迎えて行われた。福さんと言えば、対話型美術鑑賞で知られるアメリカ・アレナスを日本に紹介し、「なぜこれがアートなの？」を翻訳出版されたことでよく知られているが、今回の研究会では、福さんが教鞭をとられる大学で実践されているプロジェクト、Art Communication Project (ACOP) (<http://acop.jp/>) の話を中心に、コミュニケーションによる鑑賞教育について講演された。

まずは福さんから、「美術館は必要であり、素晴らしいもの」という美術館性善説への疑問が投げかけられた。全国に存在する美術館博物館関連施設は5,614館もあるにもかかわらず、京都造芸大の学生による街頭アンケートによると（年間を通して授業で実施、毎年報告書『わたしたちがみた当世美術館事情』が出版される。サイトより購入可）、約500名のアンケート回答者のうち、1度も美術館に行ったことない人が多数を占めたという。また、別のアンケートで美術館の存在意義について美術館にたずねたところ、館側から「収集・保管、展示、調査研究」という回答があったという。はたして、美術館の目的はこれだけなのか、これだけで美術館は必要なものであり素晴らしいものと言えるのだろうか。本来、美術＝アートというのは、美術作品というモノとそれをみる人との間に介在するものではないか。こうした疑問は実際に海外の美術館でも波及しており、海外では、美術作品そのものに焦点をあてる活動から、作品と人との関連性を重視するような活動が増えてきているという。

アートが「作品と人との間にあるもの」であるな

らば、美術作品と来館者との間に発生するコミュニケーションの可能性を提供できるのが美術館という場である。そしてその美術館で作品と出会うことが、来館者自身の学びとなり知識や能力となっていく。知識とは、学ぶ側が感知した時に初めて感得するものである。そしてエデュケーターとは、美術館来館者をサポートし、来館者が持つ知識や経験から学びを引き出す場づくりを支援する役割を持つ、と福さんは語った。

美術館におけるこうした学びには、コミュニケーションを閉ざさないことが大事だという。そのコミュニケーションを閉ざさないための項目として下記の3つが挙げられた。

- 1) ひとつの正解、あるいは到達点を想定しない
- 2) 様々な解釈、誤解や妄想が許されている
- 3) 「訂正の道」が約束されている

事実はひとつだが、みた人の解釈や考え＝真理はみる人の数だけ存在する。作品に描かれたモノだけではなく、作品から想像される様々なコトをさらに想像し、読み取り、考えていく行為がアートであり、その何かから新たな意味を作り出すのが鑑賞者である。そして歴史を鑑みても、死後評価されるアーティスト（ゴッホなど）は多数存在し、鑑賞者が変われば作品の評価も変わるように、鑑賞者は主体的に作品と関わることができ、また作品はみる人によってはじめて生命が与えられる。美術鑑賞とは、作品と鑑賞者との間におこるキャッチボールであり、知識だけではなく、意識を持って「みる」ことで鑑賞も変わっていくのである。なお、「みる」という行為には以下の3つがあるという。

- *実際にはみえないものをみること
- *みたいことだけをみること
- *みたくないものに目をつぶること

みるとは、とても複雑な行為なのだ。作品はみる

人によって初めて生命が与えられるものであり、ときには過去の情報や知識が時には学びの邪魔をすることがある。知識だけではなく、意識を持って「みる」ことによってその人自身の学びとなり、知識や経験となっていく、と福さんは説明された。

次に、京都造芸大で行われているプロジェクト、「Art Communication Project (ACOP)」の説明があった。ACOPは、鑑賞という体験を人とのコミュニケーションを通じ、アートと自身の可能性を広げる行為を培うプログラムで、コミュニケーションを用いた鑑賞であり、鑑賞の中からコミュニケーションを養うという。

このACOPでは、作品を読み解くために5つのキーワードを掲げている。

- *意識をもってみること
- *直感を大切にすること
- *考えること
- *話すこと
- *聞くこと

ACOPでは、鑑賞の際に複数の鑑賞者をグループ化し、20分から30分ほど対話をしながら鑑賞してもらうという。最初に作品をみてもらい、その後鑑賞者に作品の第一印象などとその理由(例えばそれが「つまらない」といった感想でも)を語ってもらう。ナビゲーターである学生は仲介者となって、上記の作品を読み解くキーワードを意識しながら鑑賞者それぞれの意見を引き出し、作品の理解を深める手助けをする。

感動は言語化することで感動を持続することができるそうだが、こうして自己の考えを言語化し、対話を通し他者と共有することで、考えが発展しお互いに学びを始めるという。

作品と鑑賞者の間に立ちあがるコミュニケーションこそが“作品の体験”であり、ACOPの目的とする鑑賞、と福さんは説明された。

実際、ACOPを受講した学生にも変化が表れたという。受講当初、「自分が作品について教える」あるいは「話してあげる」という意識を持ち、一方通行の「話し」しかできなかった学生は、やがて鑑賞者の意見を深く理解し、対話の中から鑑賞者の意見を引き出すコミュニケーションに変わっていったそうだ。

そして、作品や他者と自己との関係を通し、自分自身の発見にもつながっていったという。

福さんにとってのエducatorとは、こうしたACOPで実践されている、「作品にあるたくさんの『?』、鑑賞者が感じる『?』をつなぐ=コミュニケーションする、ことでたくさんの『!』になっていく、その『!』を増やすお手伝い」をする人、という。そして、エducatorに必要なのは、コミュニケーション能力、と締めくくられた。

その後の質疑応答の中では、ACOPがアート以外の分野で応用されているかといった話題がのびたが、実際には、患者とのコミュニケーション力を必要とする看護の世界や、京都大学総合博物館との提携で歴史系自然系博物館でも応用されている実例が挙げられた。

また、アートにおける「制作」と「鑑賞」と関係性については、「制作者にとって、自分の作品の一番の鑑賞者は自分。いい制作者になるためにはいい鑑賞者にならないと！」と福さんは笑顔で応えられた。

今回の福さんの講演は、「エducatorとはどういう役割か」が具体的に示された内容であった。1990年代に対話型鑑賞教育プログラムが日本に紹介されてより約20年が経過しようとする現在、そのプログラムの人材育成として展開されているACOPが今後エducatorの育成にどのように関わっていくのか、注目していきたいと思う。

第5回 エducator研究会報告



日 時：2010年12月4日（土）14：30～
場 所：千葉市動物公園 動物科学館（会議室）
報 告：千葉市動物公園 飼育課 並木美砂子

研究会の前半は、マウス（ハツカネズミ）観察ワークショップ、後半は「子どもの声に耳をすます」と題した発表であった。

ワークショップは、テーブルにハツカネズミの小さな運動場を臨時で作成し、2～3人のグループでの観察から始められた。このWSの目的は、「自分の観点からの観察」と、「他者視点を採り入れた観察」の違いをしっかりと味わってもらったことだった。子どもたちに動物を観察してもらうときには、観察の視点をあらかじめ提示することが多いが、今回はあまり前情報を入れず、それぞれのグループに2頭ずつ配置し、「2頭のしぐさや体の外見的特徴を比べながら見て下さい」だけを指示して始めてみた。

しかし、まず自分だけでじっくりとマウスを観察というのは意外に難しいことがわかった。参加者は互いに知り合いであり、相手と話し合いながら見るようになってしまったからだ。それに、おしゃべりしながらの観察のほうがたしかに楽しい。2頭の小さなマウスは、一見すると同じに見えるが、たった5分でも集中して観察していると、行動と形態の違いが見えてくる。足の動かし方、毛並み、体長と各部位の大きさのバランス、ひげの長さ、等々。2頭を比べるからこそできる詳細な観察である。

次の課題は、組んだ相手との観察視点の交換だ。自分とは違う視点から観察し、発見した内容を相手から聞くと、「なるほど、そう見えますか」「それは気づかなかった」ということになっていく。また、マウスを漠然と見ている訳ではなく、予想や仮説をたてながらの観察であることも自覚できたようだった。仮説をたて、観察し、その仮説を修正し、またよく見る・・・というように対象と自己とのやりとりが続いていく。また、書く時間を意識的に持ちながらすすめないと、話すだけになり、記録ができない場合が多いことにも気づいた。

ここで、動物の観察記録のしかたに関して気づいたことがあった。今回のように、フォーマットされた記録用紙がないと、「お話を書く」ように記述するという点である。たとえば、「少し大きい方のネズミは足の動きが小さい方のネズミよりおそい」「手を入れると小さいほうは降りようとするが、大きいほうは登ってくる」「体の大きさに少し違いがあるけれど、手足の大きさは、2頭で同じくらい。小さいネズミのほうは手足が（相対的に）大きい」というように。

たとえば、行動観察であれば、あらかじめ行動カテゴリーが決められた表をもとに、時間毎にそれを

チェックしていくことが多い。行動カテゴリーとは、たとえば「採食」という大きなカテゴリーの中に「においをかぐ」「ほる」「かじる」という小カテゴリーを配置し、「移動」というカテゴリーであれば、その下位カテゴリーとして「登る」「降りる」「尾を使う」「ホッピング」「つかまる」などを用意し、決められた時間刻みで1-0（ワンゼロ：あるなし）で評価していく。形態観察であれば、イラストを描いてそこに「→」を入れて特徴を記入していく。

そういった観察の仕方とは全く異なる、自分の視点を思いっきり投入して仮説も入れ混ぜてお話しを書くように記録するスタイルは、ある意味、他者からみてわかりやすいということに気づかされた。

なお、「他者視点」の採り入れという点では、美術館などでの「対話型観賞」の際のナビゲーター役をおこなったので、その役割も相互に担って他者の観察視点を自分のものとする体験をすることになった。他者の視点を採り入れて、徐々にそのグループ内の「テーマ」がはっきりしてきたところと、逆に拡散していったところともあった。また、最終的に「何が見えてきたか」に収斂する傾向と、相互に見えていることの違い自体を楽しむ傾向もみられた。

いずれにしても、今回の観察ワークショップは、生きている動物を対象として、「見ていることを言語化し（話し）、書き、視点を交換する」ことの体験だったので、その中では「見ながら書く」ことの難しさを改めて知ることとなった。描画と文字は、観察する行為の場合になくしてはならない記録の要素である。まず描くこと書くことは、とりもなおさず、自分との対話であり、何が今見えているのか、感じているのかを表現する大切な手段と言える。記録があれば、少し時間差があっても、だれかと視点の交換をしたり、記録紙によってそれを代替することも可能となるからである。

研修の後半は、当園の「ふれあい活動」でのこどもたちの言語表現、および「お手紙コーナー」での書かれたこどもたちの絵やことばを紹介した。前者ではつぶやかれる無数のことばをきちんと「聞くこと」で感じ取れることを、後者では「動物への質問」や「呼びかけ」の底に流れるこどもたちの気持ちをくんだ「お返事」を書き続けることで鍛えられる、スタッフの側の感受性について紹介した（スライド参照）。話されたこと、書かれたことに耳をすますことは、相手の気持ちの中に入り込んで想像することを鍛え、コミュニケーションの可能性を広げることになると思われる。

以上、今回の研究会のテーマは、大きく「コミュニケーション」であった。生きた動物を観察する際の記録と対話の体験、および「動物とのふれあい」活動の実践紹介によって、多様なコミュニケーションのかたちと可能性を考えたものになったかと思う。

(解説者が)子どもの声に耳をすます理由

- なぜ「子ども」か？
その世界に入り込みやすい
表出された「ことば」は直接的であり、端的に感情が表現されていることが多い
- 解説者が、その子どもの声によって自らの世界を拓けることができる
- 拓げたことによって、子どもは自分や相手の世界を「ことば」を通じて理解しようとする

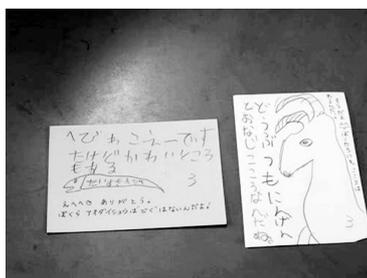
小動物とのふれ合いで聞き取りの内容

- お耳が桜の花びらだね (小1)
- ふわふわしてマシュマロだ (小1)
- 今ね、わたしのまねしたんだよ！ ほら、ね、わたしを見てでしょ。そうしたらね、こうやって(顔をモルモットに近づける動作)するの、ほら、(モルモットも)こっちに近づく。
(年長)
- ふわふわ、ふにやふにや

小動物とのふれ合いで「 」は質問

- 「〇〇はどんな気持ちだと思う？」
たのしいって (小1)
「どうしてそう思う？」
うーんと、こうやって、うん・うんって言ってるから
- 「〇〇はどんな気持ちだと思う？」
ちょっとはずかしいかなって
「どうしてそう思う？」
はじめてわたしに会ったからね、はずかしいかな

動物へのお手紙とその「お返事」例



第6回 エducーター研究会報告



日時：2011年3月5日(土) 10:30～
場所：水戸芸術館現代美術ギャラリー
報告：JMMA理事 栗原 祐司

第6回の研究会は、茨城県水戸市の水戸芸術館現代美術ギャラリーで行われた。参加者は遠方なので少ないかと思われたが、28人もの参加があった。実は、水戸是水嶋英治副会長(常磐大学教授)のお膝元ということもあって、常磐大学の学生が多数参加してくれたのである。

水戸芸術館では、ちょうど「高校生ウィーク」を開催中で、その時期にあわせて研究会を開催した。約1ヶ月間の「高校生ウィーク」の間中は、高校生及び15～18歳の来場者は開催中の展覧会を無料で何度でも鑑賞することができ、来場者は誰でも利用できるカフェが開設され、その運営も高校生、大学生のボランティアが中心になって運営されている。同館では18年前から「高校生ウィーク」に取り組んでおり、今ではすっかり地元で定着したようだ。

研究会は、まずカフェ「喫茶とびら」で、同センター教育プログラムコーディネーターの森山純子さんに同センターの活動内容を紹介していただいた。ふだんは展示室やワークショップにも使われるスペースに設けられたカフェには、ゆったりとしたソファやテーブルが据えられ、水戸芸術館のカタログなどアート関連の書籍が並んでいる。セルフサービスのカウンターにはコーヒーやお茶が用意してあり、無料で飲むことができる。そのほか、ここではいろいろな作品が展示してあり、一つはカラフルな布や糸などを自由に使って作品を制作できるコーナー「日々の針仕事」、もう一つは、文谷有佳里さんによる公開制作&ワークショップの「ドローイングー私の居場所、描く場所」コーナーで、電話しながらい

たずら書きしたようなドローイングの公開制作が行われ、来場者は自由にドローイングを楽しむことができる。また、「ブカツ」と呼ばれている学芸員やアーティストとの長期ワークショップがあり、一つは高校生による高校生のためのギャラリーガイドを作成する「書く。部」、もう一つは撮った写真を本人のコメントとともにポストカードブックに仕立てたり、カフェ会場で上映するスライドショーを制作する「写真部」だ。昨年はこのほか「放送部！」や「サステナ部」があった。

また、今年は展示室で「クワイエット・アテンションズ 彼女からの出発」展を開催しており、女性アーティストによる多様な作品世界を紹介していたが、これに連動したワークショップも開催された。ワークショップはそれぞれ講師を招いて行われ、展示作品を題材に短編小説を書く「文芸の時間」、自分や周りにいる人たちがごきげんに過ごすためにできることを考える「保健体育の時間」、水戸芸術館にくつろぎ空間を作るための増築を行う「技術の時間」、食で人と人をつなぎ、場をつくりだす方法を実践する「料理の時間」の四つが行われたようだ。これらの活動に参加することによって、一過性の利用ではない美術館とのつながりや、来館者どうしのつながりができてくるのだろう。



さて、研究会では、やはり森山さんの御配慮で、すぐ近くに住んでいる白鳥建二さんに御登場いただいた。白鳥建二さんは全盲のマッサージ師で、作品鑑賞を「言葉を介したコミュニケーション」としてとらえるミュージアムアクセスグループ MARの活動などを通じ、視覚に障害がある人となない人が一緒に美術作品をみる鑑賞方法を各地の美術館で提案している。水戸芸術館で年に数回開催される視覚に障害がある人とのツアー「session！」のナビゲーターを務めているが、今回は特別に一時間程度お話をうかがった後で、実際に白鳥さんと一緒に「クワイ

エット・アテンションズ」展の作品を見学し、作品に触ることなく、言葉で表現することによって鑑賞するという経験をさせていただいた。白鳥さんのお話の中で印象深かった言葉は、「作品の側から手が伸びてきた感じ」（現代アートに出会って「これだ」と思った感覚）、一緒に歩いてくれる方のノリに助けられて楽しくなっていくこと、「見えている人は、見たらわかる」と思っていたが、「見ても迷うことがあるんだ」と知ったこと（「見ている人が迷ったら、ぼくも想像していいんだ」）、教えてもらっているという感覚ではなく、「自分が見ている」という気持ちになっていく、作品にはエネルギーがある、その人とその作品とのあいだでしか起こらないことを大事にする、「鑑賞する」を自分のものにする…などなど。

「ことば」を主たるメディアとして追求する白鳥さんの様々なエピソードやその時の考えなどを聞いていて、自分もそんな風な楽しみ方をしてみたいと思ったのは、私だけではないだろう。

付記：2011年3月11日に発生した東日本大震災によって、水戸芸術館はパイプオルガンのパイプの落下、美術展示スペースの天井崩落、窓ガラスが割れるなどの被害があった。幸い人的被害はなかったとのことだが、7月初旬まで休館を余儀なくされた。幸い7月9日から事業が開始され、現代美術ギャラリーも7月末から再開される予定と聞いており、早期の復旧を期待したい。

『100人で語る美術館の未来』

福原義春編、慶應義塾大学出版会

2011年2月25日発行、224頁

ISBN978-4-7664-1801-9 定価：2,500円＋税

「美術館はあなたにとってどんな場所ですか？」
「人と作品がかかわる意味とは何でしょう？」「あなたが踏み出す、明日への一歩は…？」

この3つの問いは、第4回ミュージアム・サミット「100人で語る美術館の未来」にて行なわれたワールド・カフェのテーマである。主催者であるかながわ国際交流財団は、本書に先立ち、2001年からはじまった第一期円卓会議の内容を纏めた『解はひとつではない』を発刊し、続く円卓会議は世界各国の美術館館長による報告と議論を行なうミュージアム・サミットという形式をとり、その内容を第2回は『ミュージアム・パワー』、第3回は『ミュージアム新時代』として本に纏めている。いずれの書籍も優れた取組を実践するミュージアムの話であり、我が国のミュージアムの新たな地平を切り開くことにつながる示唆に富んだ内容であるといえる。

そして、第4回ミュージアム・サミットの内容を纏めた本書は前3回と趣を異にする内容となっている。本書は二部構成となっており、第一部「人と作品をつなぐ回路の設計に向けて」では、2日間にわたるミュージアム・サミットの基調講演、事例報告、パネルディスカッション、ワールド・カフェの4編がその記録として収められている。第二部はミュージアム・サミット後に開催された座談会とインタビューの2編で構成されている。

第4回ミュージアム・サミットの大きな特徴は、前3回の美術館館長による円卓会議形式ではなく、美術館スタッフ、企業関係者、研究者、社会教育・文化機関、学生、教育関係者、文化行政官、アーティスト、市民団体など様々な背景を有する100人超の人々が対等な立場で自由に意見を交わす「ワールド・カフェ」という形式がとられたことである。このような多様なステークホルダーが一堂に会し、社会の中の美術館像について議論することは極めて稀なことである。上記の3つの問いに



する100人超の参加者の言葉は、実に多様であり、本稿では纏めきれぬものではない。ぜひ本書を手にとり、その内容を確認していただきたい。

また、本書の示唆に富む話題として、ワールド・カフェに加え、鷺田清一氏が基調講演にて話された「あさっての美術館」という言葉を挙げたい。鷺田氏はこの「あさって」という言葉を「明日」の延長としての「明後日」ではなく、ある日どこかで一線を飛び越えた、その先という言い方をもって「あさって」と表現している。

この「あさって」という言葉をミュージアム・マネジメントの分野から考察したい。マネジメントとは平易に表現すれば「組織がその目標を達成するための理論」とすることができる。つまり、目標（先）へ向かう志向性といえるが、現代のミュージアム・マネジメントの課題の多くは顕在化したニーズへの対応に終始したものであり、前傾姿勢の「明日」しか見ていない。周知の通り、日本のミュージアムは欧米の思想を輸入する形でまず「ハコ」が整備され、今日はそのハコの有用性を立証するために人が多く入ること（入館者数の増減）を重要な指標のひとつとして評価してきた。このことが日本のミュージアム・マネジメントを近視眼的に陥らせた要因のひとつであると考えられる。ミュージアムが現代社会の文脈の中で求められている多様性に応えるためには明日の延長ではない「あさって」へ思いを馳せる必要を切に感じる。

本書の100人超の声はミュージアムの多様性・可能性の表出であり、「あさって」への道筋である。ここを出発点に新たな日本のミュージアムの形を考察することができるのではないだろうか。

（共栄大学 平井 宏典）

掲示板

第16回大会開催のご報告

去る6月4日(土)・5日(日)に九州産業大学で開催されました第16回総会・大会は、大会テーマ「ミュージアム・リテラシー —博物館職員の役割と地域連携・国際化—」のもとに盛会のうちに終了することができました。初めての地方開催にもかかわらず、九州支部の吉武弘喜支部長をはじめ、緒方泉理事、会場をご提供くださった九州産業大学の皆様のおかげをもちまして、多くの会員の皆様とともに、会員外の方にも多数ご参加いただき、充実した大会となりました。まことにありがとうございます。

詳しいご報告は、会報61・62号に掲載する予定です。どうぞご期待下さい。

また、今理事会・総会において、東日本大震災に対する学会としての取り組みが下記の通り提案され、承認されましたのでお知らせいたします。皆様のご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

平成23年6月4日

東日本大震災支援協力に関するJMMAアピール（案）

日本ミュージアム・マネジメント学会

日本ミュージアム・マネジメント学会（JMMA）は、去る3月11日に発生した東日本大震災で被災した博物館の復旧及びその地域の文化の復興に対して、中長期的視点に立った支援・協力を継続的に行います。

こうした活動を通して、被災博物館及び地域に関する情報収集・整理、復旧・復興への支援活動とその過程・成果に関する検証・分析を行い、今後起こり得る災害危機に備えた参考資料を提示します。

記

1. 東日本地域の博物館等の被災状況に関し収集調査されている情報について、JMMAホームページを通じて会員間の情報共有を図る。さらに国際的な情報発信を行う。
2. 博物館や地域の復興について、要請に応じてJMMAが有する専門知識・技術を提供する等の協力を行うとともに、中長期的視点に立った支援方策を検討する。
文化庁の文化財レスキュー事業に、マネジメントの面から支援・協力を行う。
3. 様々な機会を通して、会員や国内外の博物館関係者からの義援金を募り、関係方面に寄付を行う。
4. JMMA会員が被災博物館の支援を行った場合は、その支援状況、成果等をJMMAに報告するとともに、JMMAは、メーリングリストやホームページ等を通じて、適宜その情報を会員及びミュージアム関係者に公開する。
5. 上記の成果を、JMMAの研究部会や大会、会報、研究紀要等で発表する。先ず、東北支部と協力し、東京及び東北地方におけるシンポジウムの開催を計画する。

以上

i n f o r m a t i o n

◆文献寄贈のお知らせ

- ・東京家政大学文学部心理教育学科
『学芸員課程報告書 2010年度』
- ・東京大学出版会
『つながる図書館・博物館・文書館 デジタル化時代の知の基盤づくりへ』
- ・椛山女学園大学学芸員課程
『Bulletin of Sugiyama Museology 16』
- ・美濃加茂市民ミュージアム
『美濃加茂市民ミュージアム紀要 第10集』
『みのかも文化の森 年報 Vol.10』
『みのかも文化の森 活用の手引き活用実践集 平成22年度版』
- ・鈴木一彦著
『美術館・博物館で働く人たち』
- ・明治大学学芸員養成課程
『Museum Study 22号』『Museologist 26号』
- ・公益財団法人 せたがや文化財団 世田谷文化生活情報センター
『生活工房年次報告書 2010年度』
- ・財団法人地域創造
『「公立美術館の公益性に関する指針」についての調査研究報告書』
- ・公益財団法人多摩市文化振興財団
『パルテノン多摩収蔵写真資料集 航空斜写真で見る多摩ニュータウン』
『パルテノン多摩特別展図録「多摩・商店ことはじめ～商店の歴史と多摩ニュータウン～」』
- ・国立民族学博物館文化資源研究センター
『博学連携ワークショップ「学校と博物館が学びあえる場の構築をめざして」報告書』
- ・財団法人キープ協会
『「第3回つなぐ人フォーラム」実施報告書』
- ・共用品ネット『ミュージアムのUDサポートガイド～多様な来館者ニーズからの提案～』
- ・入間市博物館『入間市博物館紀要第9号』

u o i t e w j o j u !

新規入会者のご紹介

【個人会員】

赤坂 有美
秋山かおり
秋山 和彦
浅田 正彦
井上 遼
大島 徹也
清水 則雄
高橋 紀子

松本市立博物館
杉並区立郷土博物館分館
千葉県立中央博物館
九州産業大学
愛知県美術館
広島大学
株式会社美術出版社

夏井 琴絵
橋本 知佳
丸尾 いと
山内 利秋
大和 淳

広島大学
九州産業大学
九州保健福祉大学
新潟市水族館マリニピア日本海

【法人会員】

佐賀県立宇宙科学館

【学生会員】

土屋 正臣 東京大学大学院

(五十音順・敬称略)

日本ミュージアム・マネージメント学会法人会員 (2011年6月現在)

株式会社アートプリントジャパン
アクティオ株式会社
(財)阿蘇火山博物館 久木文化財団
株式会社江ノ島マリニコーポレーション
独立行政法人 科学技術振興機構 日本科学未来館
カロラータ株式会社
交通科学博物館
佐賀県立宇宙科学館
財団法人竹中大工道具館
公益財団法人 多摩市文化振興財団
株式会社丹青研究所
株式会社丹青社
つくば科学万博記念財団
東京家政学院大学

東京家政大学文学部心理教育学科
株式会社トータルメディア開発研究所
内藤記念くすり博物館
長崎歴史文化博物館
株式会社西尾製作所
株式会社乃村工藝社
株式会社文化環境研究所
株式会社文化総合研究所
ミュージアムパーク茨城県自然博物館
公益財団法人山梨県青少年協会 (山梨県立科学館)
UCCコーヒー博物館
早稲田システム開発株式会社

(五十音順・敬称略)

学会活動に協賛していただいております

JMMA会報 No. 60 (Vol. 16 no. 1)

発行日 2011年 6月30日

事務局 〒136-0082 東京都江東区新木場2-2-1 TEL/FAX 03-3521-2932

編集者 高橋信裕・齊藤恵理・津久井真美 HP: <http://www.jmma-net.jp/index.html> e-mail: kanri@jmma-net.jp